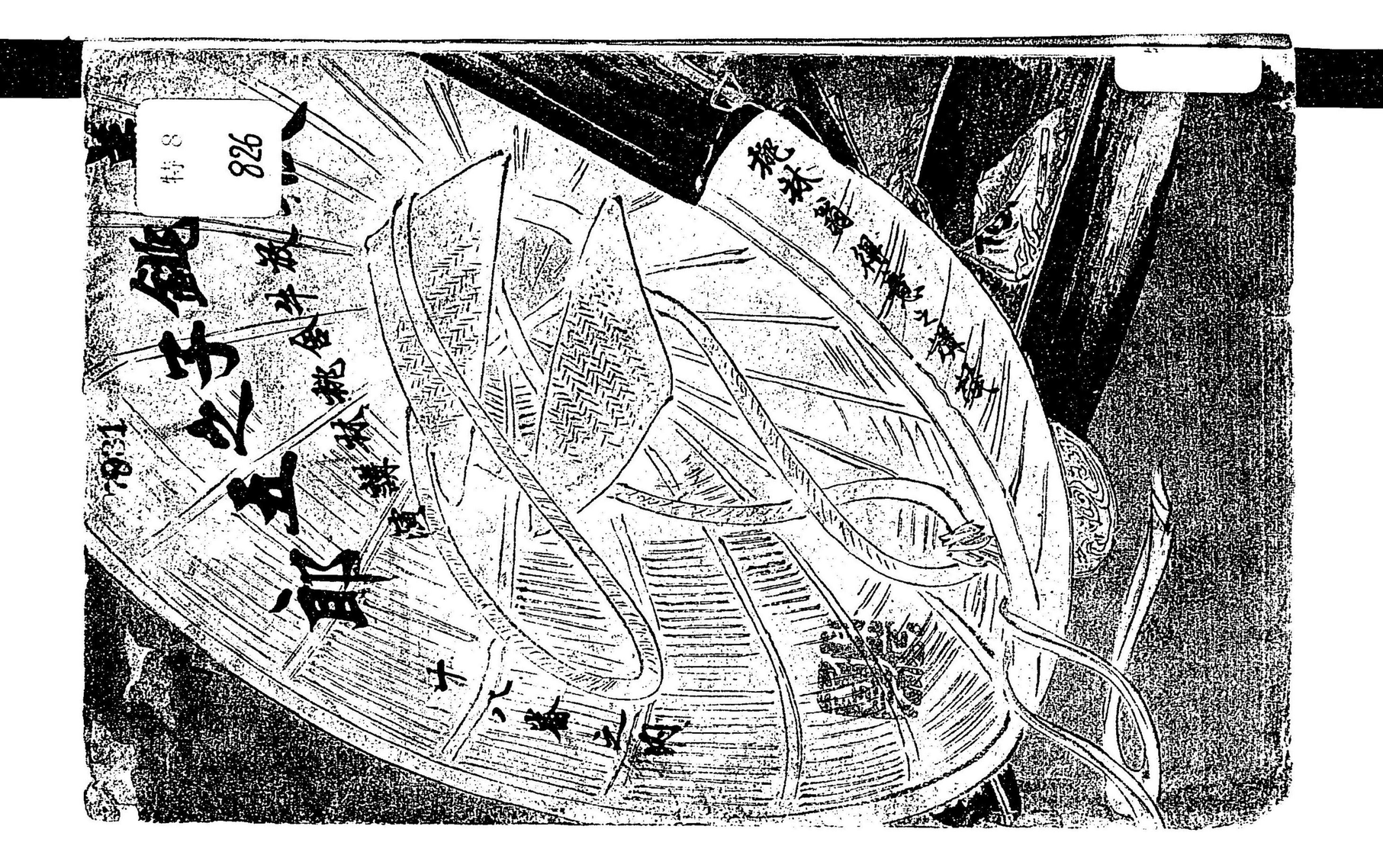
826

銚子の五郎序

義に勇み俠に富むは我國人の特性にして就中ろの義俠客を出すは關東を以て最と爲す銚子の五郎も亦其なり而して其實譚を講ずる者は誰ぞ即ち現時講談師の泰斗として稱揚せらるゝ所の放牛舍桃林翁なり彼は近世稀なるの俠客是は今世稀なるの講師焉んぞ妙と呼び快と叫べざるを得んや請ふ大方の諸君試みに一讀して余が言の虛ならざるを知れ

東京帝國大學圖書之印

といつになく四角張たる小理屈を並べる者わやまと新聞に其人ありと知られも何にもしないけれど併し肉氣がない評判の

明治廿七年花月

骨皮道人、〜るす

特8
826

銚子之五郎

放牛舍桃林講演
今村次郎速記

第壹席

扨て伺ひます講談ハ下總國銚子の地に其の名を聽かし遂にハ日本の果なる長崎松前に參りましても俠客肌の者に其の名前を知らざる者ハ無いと云ひます、銚子の五郎、此の土地で勇猛ハ曾我五郎時致に劣るかも知らぬが氣性ハ五郎時致にをさ〳〵劣らざる肌合なりとて人こぞつて五郎〳〵と呼なせり、兎角に俠客と云へバ賭場を開き「カスリ」と稱へる物を取り又ハ酒食に耽り縁のない所へ縁を組んでヤレ此の女ハ俺が虫だの又ハ俺にハ斯いふ縁があるのと、からんだ事を云つて柄のない處へ柄をすげるのが俠客のやうに思ひ人の怖がる人を以て道樂者是を俠客親方と思ひます

るのゝ大きに違ひます仲間の道ゝ立ぬいて思ひがけなき難題抔をヤし掘られ寃に陥いる者と見れバ是をいたゝり是を助け兎角悪人の爲に倒され理を以て非とせられ時の役人の不正の處置を悉とく恨み是を已れが身を抛て取挫ぎ假令役人と雖ども道に違ひました事がありますれバ一寸も跡にゝ引かず一文半銭禮を受ずして身命を抛ち人の爲なれバ我が身を捨て又た向ふを切て親の敵の助太刀をもいたし難澁の者を救ひ上げるやうに致しますのを男伊達とも云ひ或ゝ俠客とも是を稱した者でございます中〳〵賊などに交ゝり折〳〵の令達にも觸れるやうな者とゝ必らず交際をしない位にて我が仲間中に宜しからざる事ある時ゝ互ひにヤ合して人無き地へ連れて往て或ゝ切り又た突ましして其の死骸を人にも見せないやうに致すを以て其の人〳〵の手柄にいたした者でございます、茲に下總國香取郡の香取明神の祭禮が舊の四月五日大した繁昌な事でございます、高小屋と唱へる物がズッと社内へ出來ます是ゝ此の内に於て博奕を盛んにいた道す

場其の小屋〳〵ゝ軒を列べて這入り口よゝ乾兒の者醤油樽へ腰を掛け切緒の草鞋穿を掛け懐中には合口の用意をいたし是ゝ決して上役人に對して敵對ます次第でゝなく其の仲間丈の掟よ觸れたる者を防がん爲の用意でございます、どうも人の出るの出ないのでゝなく近郷近在らいたして男女老若打混じて參ります、殊にゝ江戸から諸〳〵の商人が參り見世物や何か皆な見世を開いて彼方よ機鋭があれバ此方にゝ綱渡りがあり向ふに芝居があれば此方にゝ相撲があり山雀が藝を致せば猿が芝居をする又江戸邊りに於て涙品店晒しになつた者ゝ此の市へ持て參りまして賣ります凡て八幡中山成田柴山鹿島などゝゝ皆な是へ持て參りました者でございます、是に依て往來ゝ押返されぬやうな騒ぎである處へ遙か遠つて今ヤしました小屋を列べて第一番の小屋ゝ水戸の中の湊の住人不二身で大力にて身の丈五尺九寸耳の遠い處からして雙の親分といゝれた忠三郎、二番の小屋ゝ下總の香取郡神崎の友五郎、三番ゝ房州長

狭郡濱荻村の在字上人塚和泉村の無腕與兵衛四番目ハ房州平郡那古の初五郎五番目が同國平郡佐久間村の甚右衛門甚七兄弟六番目の小屋が上總の夷隅郡勝浦の倉右衛門第七番目が常州鹿島郡大船津の千代吉社ヨ向かつて東の小屋八番目ハ一際目立つて景氣宜き下總の海上郡銚子の飯貝棋和田町閑八州に其の名を轟かしたる當時賣出しの木村屋五郎第九番目ハ常州行方郡潮來の仙臺の勝第十番目ハ同國鹿島郡大倉の力藏第十一番目ハ野州上都賀郡栃木東町の後越善兵衛第十二番目ハ上總の堀の内の龍助何れも皆な一騎當千泣く子も默る處の勢ひにて名を賣たる人〻が居りまし此うなつて見ると立上つた人達ハ僅かの者にて張人彼のお客と唱へ房總三ケ國或ハ常陸上野下野武藏相摸遠く甲斐信濃の邊りからも馬に五貫束を結付け各〻此の所へ參ります其頃迚も御政治も嚴重なれども五里三里先へ關八州方の御廻りと稱へるお役人を防がん爲に見張りの者が出て居て一〻是が注進に及び油斷なくいたして居ります

第二席

然るに銚子の五郎の處へ○親分一寸ヤ上度う存じます一際高い處へ布團を五枚敷いて其の上へ黑羽二重の紋附白博多の帶をゞめ非上眞改の一刀を膝の下へ押かゝ鵜の目返しの脚半草鞋穿きで柱にもたれて喧嘩口論其他臨時の事の起る事もあらんと八方へ眼を配つて控へて居る例の五郎丑何だ○只今飛だ喧嘩が初りまして此のツヒ津の宮といふ處で名主どんの小旦那が何か津の宮の村田の家へ今度江戸から稼ぎに來て居る藝者と情交う何かしたといふので止せば宜いのに色の出來ねへ奴の仕事といふ者ハ往ねへ者で溝ッ川の田螺同樣に泥の中へまぶれて居やがる處の奴等めが小旦那に喧嘩を仕掛けて小旦那の頭を叩き割てどうも今津の宮の村田の家ハ鵜獲へるやうな騒ぎ夫に又此の銚子の名主どんの小旦那も同じく是と同席して居た者だから共に怪我をなすつてマア何だか手當をしたけれども療治が叶ふかどうだかといふ大變な騒ぎでございます五夫ハとん

も無事だ斯うして居てゝ濟まねへ、ど直に五郎ゝ高い處から飛で下りて
五「さて御一統様、旦那方へ上ますが折角お慰さみに御出で下さいまして
御樂しみでございますが是も思ひ掛ねへ處の時の災難斯ゝ此いふ次第柄
でございますに依りて兼ましたがどうか今日ゝ是で解散にいたします、ど
うか皆さんお歸りを願ひたうございます、御怪我のないやうよ裏の方の小
屋を切り破りましたから是から密そり出て下さい表口ゝ締りを附けて仕
舞ひました御危險うございますから御綏りと出て下さいといふと客チー
親分成程お前ゝ此の土地に對して義理を立て大勢を追出して仕舞つて今
日ゝ是で止めにすると云ふのか知らねへが此の祭りが三日も四日も續く
祭禮ぢやアなし今日と見込んで置ても雨が降れば夫ッきりになるンだ他
ゝ今日此所で五兩と十兩の金を取られて居るンだ然んな事を云ゝずとモ
ー些とやつて貰へてへぢやア無へか五御尤もでございますが夫ゝ私しが
御損耗を掛けないやうにしたいがお前さん一人ぢやアなし一ゝ償ふ譯に

も往ないから何か又御埋合せを致しますから今日の處ゝ止めて頂きたう
ございます又此の入れ合せゝ何とか名を附けて私しの土地の觀音の境内
か何かで又たやりませうから何卒此の所ゝ御勘辨を……客夫ぢやア勝た
者ゝ宜いが負た者ゝ詰らねへ五夫ゝ固より是が無い迚も際限のない者を
ございますから愈〳〵左樣ならばと云つて小屋を毀すまでに御勝ちなさる
方もありお負になる方もあり全体此ンな事をしたくねへけれども昔しか
らして引續いてやつてる者だから私しゝ茲へ出て居て何も儲かる次第で
もございません喧嘩口論のないやうに又上役人でも御爲入た折柄に夫に
對して不調法でもあつてゝなりません其時にゝ無禮のないやうに皆な一
統を追拂つて仕舞つて成たけ御役人の御目こぼしを……イヤ役人が目を
てばすといふ事ゝないが御目に附かないやうよして仕來つた事だからや
らうと思つたのでどうぞ然んな事を敬仰らずに今日ゝ御勘辨なつて下
さい其代り又十三日に息洲の市に小屋が立ますから來月とも云はない今

月の中だから息洲の市まで待て下さいどうぞ是で御勘辨を願ひます、と是で此の小屋の解散になつて見れば隣りから隣り迫々仕舞なければならないやうゐなりました

第三席

此の事を聞き及んだのは第一番の小屋ゑ居た水戸の聾の忠三郎　忠成程木村屋は此の土地の者が裏の小屋を切り破つて張子の人達に殘らず歸つて呉れといふのは如何にも穏やかなやうなことだけれども彼の人は此の土地の者だ下總に生れて此所が自分の土地だから然うだらうが俺は些か利根川を渡るばかりでも國の違つた土地から出て來た者だ先づ自分から仕舞ンならバ房州の人も居りやア下野から出て來た人もあつて見れバ一同の者に此事をいつて夫から自分が仕舞ふやうにして貰へてへ者ぢやア無へか銚子の五郎とも云はれる人に似合はッしやらねへ致方だ俺が往て五郎に面會しやう……イヤコレ大勢の奴等騒立には及バねへ俺も水戸の忠三郎だ子分子方の力を頼んで喧嘩口論は決してしねへ只尋常に往て話をするのみの事だと忠三郎の右翼左翼の子分で三百人宛も子分を持て居る與十小十の二人に跡の所を疎忽のないやうに吩咐け置て跡より大勢尾くのを止めて忠三郎只一人第八番目の小屋ゑ來つて忠「御免なせへまし、へー木村屋の親方は御在なさるか五「イヤ是い〳〵誰郎かと思つたら水戸の親方能くお出でゞございました、マア親方此方へお這入ンなさいまし忠「イヤ這入る這入らねへい扨置て少しおめへさんにお話申してへ事があつて出ました何か此の土地で間違ひがあつたやうな話し成程人の生死に拘はるやうな事があつて殊に名主を勤めて居なさる若旦那の身の上と聞ちやア今初て今直に止めても仕方がねへ義理と褌といふ比喩がある今日人間が人情義理を欠いていい世の中は闇だ夫は宜うゞせへますが私共は言はバ旅の者だ隣り合つて居るやうな土地で手を叩けば銚子の川口から向ふの波先までは届く位の土地ぢやアあるけれども先づ國の變つてる常陸から草

鞋を履いて出て來た者だ何故私の方へ其の次第を云つて下さらねへンだ皆な軒を並べて終ふは一体の事だに依て據ろねへ世間の交際に隣の家が倒れて來たンで私の家も打毀したといふやうな事で仕方がねへけれども何故其の事をお前さん云つて下さらねへンだ五イヤ夫は御尤もだけれども私の小屋だけ遠慮しました夫を隣りから隣へ聞き傳へて左右に居る七番と九番の人達が小屋を終つた者だから夫から夫へと追々皆な仕舞ひなすつた事でごせへます私から止しなせへといつた次第じやア決してでせへません止して下さいと申す位ならばお前さんの處へ一番先へ言ひます何ぼ私が銚子外れに居ても其の位の事ハ承知して居やす五イヤ夫が屈かねへンだ是々で私は止めるに依てお前さん方はお前さん方の勝手におやンなさるともお止めなさるともなせへと云へバやるやらねへは此方の了簡にある事自分一人が良い子になつてお前さんが止めて見れバ私だッてもやつてる譯には往ねへ何故斯々此ういふ次第だと一應言つて呉ねへ其

つが面白くねへンだ五イヤ水戸の、お靜かにおせへやし五靜かにやア出來ねへ聲の高へのハ持前だ五デモでざいませうけれども世にいふ鹿島の言觸といふ事もあるが私が何も觸れて各々方を集めたんぢやアねへ二月十五日ハ鹿島の祭禮四月五日ハ香取の祭禮四月十三日ハ息洲祭禮此の三日ハ五德の足見たやうに三方から集まつて年々歳々やつて來たので別段に呼だり呼ばれたりする譯でもないお前さんの方からも來れバ此方からも行くが何も互ひに屈合ふといふ次第でも無へから一々夫ハ斷らねへンだ

第四席

五夫だといつて己が夫を聞て土地の名主へ胡麻を摺るのか知らねへが其の位へ義理人情を知つてる位ならバ何故乃公に云つて呉れねへ五云はねへたッて此位への事だから定めしお前さんの耳へも這入て居ると思つたのだ云はねへのが何うした五何うしたとは何だ五平常川を隔つて繰ハ遠いやうな者の折々往來中で顔を見合ても遂に一言も掛られた事もなけれ

が掛たことも無へ中だ夫に依て俺の方からお前の處へお止めなさるか夫ともなさるかと問合せいしねンだ、するともしねへともお前の勝手にしれへ俺は俺だけで止めたンだ　丑ナニ……訝しくお前に刻つけられて見りやア此まゝ忠三郎も默つちやア居られねへ耳が遠い處から人呼んで聾々といふが其の聾の耳へボン〳〵聞えるやうに怒鳴られて見ると大勢小屋外にも居りやア近邊にも人が居るから其の多勢の人の耳に聞えたに違へねへ此場で言ひ捲られて只だ歸る忠三郎ぢやアねへヤイ乃公が云つて聞せる事がある乃公が久しい跡に此の下總ゑ渡つて佐原の諏訪明神の祭日の折柄乃公の子分の奴も良くねへけれども何か行屆かねへ事があると云ふ處から其方の子分が寄て集つて乃公の子分を半殺しにして溝川へ投り込まうとしたのを折も能く潮來の漁師が是を見て貰て漸々助けて來た事がある其の毆れたのが原因になつて遂々後ゑゝ身体も利りねへやうになり今ぢやア乃公が飼ひ殺しゑして飯を喰はして居る夫からして癪に障つた

銚子の子分一應位へは挨拶もあるかと思つて今日が日まで待て居たが何の沙汰もねへ……丑オイコー聾さん能く聞きねへ忠聾とは何だ丑イヤサお前さんが自分から聾といふから夫でいふンだ俺ア然んなことは初めて聞たンだ夫が意恨で此の處へ文句を附けゑ來なすつたか忠馬鹿をいへ差し賣ぢやアあるめへし文句を附けゑ來たんぢやア無へ今日の届けの無へのと子分の打ッ放しを喰つたのと二ッ一つに引からげて其方が存念を聞きゑ來たんだ丑存念なンざアねへ忠無へとい何だ、と突然忠三郎一刀を引拔いて五郎に切て掛る丑マア待ちねへ、と莞爾り笑つた銚子の五郎實にも清氣なる手を差押て忠三郎の左右の手を確と押へ丑刃物を恐れる俺でねへが拔いたからには血を見せずには跡に引かねへ氣性の水戸の親方と豫て聞て居るから此所で騷ぐのゝ人騷がせモー少々離れた田甫中の人の見ねへ所に於て宿意があらば聞うぢやア無へか忠チー宜し然ンなら何所へでも行くに依て案内をしろ丑案内ゝしねへけれども勝負の場所もあるに

依て此方へ來いと香取明神の社内を出でゝ津の宮へ行うといふ畑道五サア此所で尋常に勝負に及ばう、と突然り五郎に於ても一刀の柄に手を掛けて切て掛らうかと思つたが左にはあらじと存じて五何と水戸の腹も立たうけれども乃公の行屆かねへ所があれば勘辨して貰ひてへ又た乃公の子分ゑ良くねへ奴があれば夫は屹度乃公が取紛してお前の顏の立やうにするから……忠ヤア弱へ事をいふナ見掛に似合はねへ弱へ野郎だ何故其の誤まり口上を先刻から多勢人の居る所で云ねへンだ人の居ねへ所でゝ手をついても誤つても人中でゝ威張るといふゝ卑怯な奴だ愈々乃公と勝負をする事が出來ねへかゝパッと痰唾を吐掛ました五郎ゝ此時に五態と是までに折れて居れば巫山戯た事を吐しやアがる高の知れたる水戸ッぽう覺悟をしろゝと云ひながら双方共に引拔いたるが暫らく火花を散して切り合てる所へ飛ンで來つた一人の旅人持て居た笠を向ふへ投出し旅人先づ御兩所少々待て下さるやうにお願ひ申したい五イヤ手を出しなさると危ねへから跡へ下ッて居なせへゝと五郎が云へば忠三郎も同じく横目で之を見て忠ヤア旅人お前方に任せがたい事だ旅サア任せがたい事でゝあらうけれども旅をかゝへて遠々から是まで來つた私ゆへ任して呉れとゝ嗚呼がましいが併し最前からの喧嘩の摸樣一通り私も聞いて居た何方を何方が怪我をしても惜い方だから夫に依てお止め申た私ゝ何を隱さう江戸の生れ江戸を鼻に掛る譯ぢやア無へが江戸から是まで草鞋を履て來た旅人の事なるに依て何うぞ私に任せないでも江戸の二字に任せて下さる樣にと是何者でござるか

第五席

此時兩人聲音に聊かも淀みなく沈着拂ッて同音に思召ゝ有難うござるが何方から先へ引いても引いた奴が負けになるのゝ私共の仲間の一ッの趣意になつて居る事で、お前さんにお任せ申たいけれども慾じ生中に任せる譯にも參りやせん御怪我のねへやうにどうぞ下つて居て下さい男左樣で

もあらうけれど私しが七重の膝を八重に折つて御詫をする「イヤ詫る詫ねへの論ゝでせへやせん互に子分の五十や百ゝ持て居るが其の子分を一人も手を出すことゝならねへと此の場へ來る事を禁じて置て兩人やつて居る事だからどうか思召ゝ御免を被りたいと二人劔と劔を合せて居り口ゝ聞いて居るけれども八方に心を配り隙あらば切込ンといふ毫も隙がございません其中にワアーワッと云ふ處の人聲これ何者にもあらず銚子の子分扱ゝ水戸の中の湊の子分が左右から乘込んで參りますと男「ヤアお前方が手を出して呉れてゝ困るに依て此所ゝ私が命に掛けても貰つて仕舞はなければならねへ皆さん待て下さるやうに私しゝ仲人でござると云ひながら例の旅人江戸ッ子の事だから齒切れも宜く痰呵を切た樣子といふものゝ流石一同の者も此の勢ひに驚きまして呆氣に取られ殊にゝ仲人といへば喧嘩の氏神其の人よ對して無禮をする譯に往かず取扱人の事ゆへ執れも跡に退つて子分待てろ待てろ何か那の人が取扱つて下さるといふから

其の人に對して失禮があつてゝ成らねへ扱人に任せて置けば何うか別れになるだらう然るに旅人今度ゝ言語も無くして突然夫へ乘込ンで來て劔と劔と合せてある下へ潜ッて首を中へ入れて男扱いた一刀に血を見なくッてゝ引く譯に往ねへものならば私が口を聞いたに依て私の腕の一本も切ンなすッて夫でどうか勘辨を願ひたい五夫までにお前さんが被仰て下さるのゝ辱けねへが湊何うだへ思然うさ考へて見れば別に深い宿意もねへ抑々乃公等の仲間といふ者ゝ心ある人が聞けば腹を抱へて笑つて跡ばやア根も葉も無へ事が其の時にゝ前後夢中に押初めた所が面目次第も無へ事とお前に對して別段に差挾んだ意恨も無へ少しあつた所が何も命の取遣りをする程の事もなし夫ぢやア此の江戸のお方の顏を立つて銚子引かうか五然うでゝんす湊然んならば此の方のお顏を立つて引ませうと左右に別れて一刀を鞘に收め莞爾り笑つた其の顏ばせ兩人ともに平常の如くにして少しも變つた樣子もないのゝ實に魂の大きい處ゝ違つたものと

見えます、さて兩人大地へ手を突て玉「アー今日扱つて下すつた貴郎ハ取りも直さず香取明神經津主命が全く此の所へ出現ましまして其の神託を蒙つた事と存じます、私ハ幼少から不孝にして親ゑ寒い時分に冷てへ布團を敗かすやうゑしたが今更ら後悔先に立たず惡戯事をする者ハ人に下げすまれ賤しめられるを知り乍ら天下の掟に背いて御役人衆を見ると用のねへ横丁を曲つたり辻堂の影へ隱れたりして詰らねへ事ばかりやつて居たが最ら私も惡戯事も是が止まりだ、さすれば私のやうな無頼者を其正の人間にして下すつたハ取りも直さずお前さんのお扱ひ失禮ながら貴郎の御身体へ當所の武神様が乘移ッたとしか思われません、どうだへ湊忠「イヤ夫ハ御主のいふ通り俺ハ國に居ると大洗ひの明神を信仰して居れば其の大洗ひの御利益を以て今の負勝も分れとなり且ハ此の香取様の庇蔭でもあらうか噫吁心得違ひをして居たが是から心を入れ變へて正業ゑ立戻らう併し持たが病ひだから丸ッきり止る譯にやア往ねへから難澁な者ハ助け

てやる惡く巾をしやアがつて人の邪魔立てをしやアがる奴ハ飽まで拙いで上御役人方のせめてお手助けでもしやうぢやアねへか玉「マア野田で此ンな事をいつてた所が押附かねへ何所かへ往て一盃飲んで祝ひませう

第六席

玉「サア御旅人此所で御名前を伺ふのハ失禮でございますが私ハ中の湊……男「エー御名前ハ存じて居ります玉「私ハ銚子の五……男「イヤ郎の字ハ御仰ンでも存じて居ます扨私ハ江戸で土橋と申て芝の邊に居ります甚五郎といふ屋敷家業のケチな奴で至つて私ハ觀音様が信仰でございますから銚子の觀音滑川の觀音或ハ常陸へ渡れば天引の觀音と諸方を參詣をし圖らずも御當所へ參つて高小屋の立たのを見てどうも道樂者ハ田舍に限る何ういふ樣子かと思つて實ハ御社内へ這入て繁昌を見ましたがギッシリともしない又た高聲を一ッ揚る者もないといふのハ正しい仲間の極めと見えまして感心して居る中に今喧嘩があると云ふのを聞き那位靜かにな

つてる者が何ういふ者だらうといふと人の話よ當時關八州の中にて兩大關とも云はるゝ銚子の親分と湊の親分が命の取り遣りだといふのを聞いたから何方に怪我をさせてもならねへと存じましたに依つて飛だ御節介と思召すか知らねへが口を聞ました併し私のやうな三下奴にお呉ンなすつたゝ何より有難う存じます折助をして居る者の私の身に取りましての擧れでせへます玉エー扨ゝ貴郎ゝ金看板の親方でゝござらンか○エー星を差された絹看板の甚五郎就ちやア此ういふ御言葉を被つて見れば隱す譯にも往ねへ尤も人の扱ひをするにゝ自分の名前を名乘身分をも明さなければならないもの玉扨ゝお前さんが親方でござつたか、アー面目次第も無へといつて銚子の五郎ゝ頭を垂れて諸の手を上へ揚げた此時膝に手を仕て中の湊の忠三郎忠エー面目次第も無へ……甚甚五郎擧を固めて手を突出し此の腕一本を各々方へ進上しやうと思つた處が無事で任して下すつたは有難いこれを遠くよ見て居た子分が何だ一人は膝へ手をつき一人

ゝ頭の上へ手を揚げ一人ゝ擧固を拵へて突出たから狐擧でもして居るやうだから妙な事をすればするものだと思つて居ると其中三人肩を列べて打揃つて見えたるが銚子の五郎ゝ斜めに子分の方を見て玉江戸の御方の扱ひで根も葉も殘さず濟んだからゝ向後水戸の子分衆へ對して無禮があつてゝ成らんぞよ此語に繼で忠三郎も同じく子分を睨めに見やり忠銚子さんとは兄弟の約をもしなければならねへやうになつたゝ此の江戸のお客さんのお扱ひ此後銚子の子分衆へ無禮をしやアがると片ッ端から踏殺して仕舞ふ世子分へエー夫から取敢へ參つて村田屋へ揚りました子分ず双子分も親分等が笑つて仕舞へバ此方等も笑ゝなけりやアならねへと水戸の子分の小十よ與十銚子方でゝ成田の甚助飯岡の助五郎此の二人が頭だつて双方とも夫へ出て首を垂れて美くしく手を打て立別れしに斯る無頼の所行に有るまじき所爲にて其の極りの正しき事といふ者ゝ中々見

事でございます、然るに此方ゝ村田屋の家へ參りますと誰でも顔を知ない者ゝ無から丑イヤ是は御爲入いまし、マアどうぞ此方へお昇りを……思江戸のお客様をお連ヤしたから宜い座敷へ通して呉ンねへ川を見通す處が宜い女是まりましてございます、どうぞ御二階へ……思銚子、此所の家ゝまだ登つた事が無へ丑マア〳〵碌な物ゝでせへません水戸邊りのやうに喰物ゝでせへません思然んな忌味をいひなさンな云ふとまだ根が殘つてるやうぢやア無へか丑併しマア津ノ宮の村田屋と云つてゝ此の土地では宜いンで手前味噌の樣だが是で銚子へ行けが隨分旨へ物もあるが……さて江戸の親分マア何うか其所へ

第七席

丑イヤ親分などといわれてゝ困ります丑然うでないマア〳〵どうぞお前さんがあつて此うして纏まつたものだから遠慮されてゝ困るからどうか其所へお座ンなすつて下ださい夫れでなければ物が嘘でございます時に

酒の初まらねへ中ちにヤ上げますが私から切り出しちやア濟みませんけれども水戸江戸の親方ゝ餘んまり猪牙掛りのやうに思召すかゝ知らねへが三人此處で兄弟の盃を交てへものだといふのゝ二人とも此方が來なさらなければ何方か死なゝければ成らねへ處勿論どの道乃公に勝ちは無へ水戸の勝つにゝ極まつてたが……思然んな事をいひなさんナ俺の事を蟇〳〵といふが夫れゝ成る程以前ゝ蟇だッたが療治ゝしなければ成らねへ者で江戸へ出て半年ばかり居て悪皆り療治をして耳の遠いのゝ直をつたから迂濶噂をすると蟇の早耳聞こえやすせ丑其の事も聞いて居るのよマア〳〵然んな事ゝ打捨つて置いて一盃飲むのが何よりだ江戸の如何でせへます丑今の御噺しゝ私から願つて兄弟の盃を願ひてへンだ此時五郎甚五郎の顔をうち守りて丑お前さんの事を失禮ながら金看板〳〵と云ますがお顔を見るのゝ初めてだがお名前ゝ豫て伺つて居ります御屋敷家業の者にして金看板の御高名を知らねへのゝ無へといふが御屋敷家業の者で

なくとも私等のやうな此ンな田舍に住んで麥飯を食てるやうな者でも知らねへ者ゝ無へンでせへますが金看板といふゝ御藥でもお賣ンなさるやうな事におもひますがぶしつけながら伺ひます思ナアニ夫がさ妙な話があればあるもので屋敷家業の者で供をするに絹の看板を渡しまする其の絹の看板を着る樣になれば折助も宜しとした者で處が私ゝ自慢な人間ゆへ供から歸れば絹の看板を上で取上げになつて仕舞やす夫を私ゝ我慢に部屋の內で絹の看板を着て居るから絹看板の甚五郎さ其つを何う間違へたか金看板の甚五郎〳〵といふので中にやア藥舖のやうにおもふ人達も幾らもあります譯を話しやア詰らねへマア銚子の親分今日ゝ初めてお目よ掛つて任せられねへ所まで任して下すつたゝ返す〳〵も有難へマア嬉しいから澤山御馳走を頂きます、と云ふ折しも女中が持て出ましたのゝ立派な料理、玉酒ゝ此所の家ゝ隨分貰いのを使ひます夫と外に何も自慢の事ゝねへが茲の家へ御出でなさると御存じの通り醬油ゝ貰いのが幾らも有

ります、刺身は、醬油が貰くないと旨く往かねへ銚子ゝ手前味噌のやうだが金、金、益、玉印、金、田などといふ是ゝ此の土地でも善いんで此の醬油といふ物ゝ外よこせへません……此れゝ岩崎重次郎といふ有名の金の家の田味噌といふのでこせへます甚エへ然うでございますかねへ私はマア江戸の者で知りませんが㊀だの大取なぞといふは矢張り此地ノ……五那れゝ野田、茂木、高梨邊りで造るので龜甲萬ゝ茂木大取ゝ高梨是ゝ又た格別の物で是から地つゝきに佐原といふ處が一あります此の佐原あたりよも良い醬油が隨分出來ます銚子の大新あたりの二階の見晴しで飲むとよッ程ようでせへやすと酒も程宜く濟して茲で愈々三人ヤ合せて此上からは生れし時ゝ同からずとも死する時ゝ同じくしやう義の爲にゝ一寸も跡へは引くまい道に違つた事ゝ聊かも、せまい依て血汐をすゝり合つて此の處に兄弟の義を結ばんと家の女共を遠ざけて三人ゝ互ひに腕を切り杯の中へ其の血汐を垂らし込んで名々此の處ゝ於てすゝり合ひ其の晩ゝ何れも此家に

泊つて殊の外愉快を盡し其の翌日佐原から房長船の名へ乘て歸るといふのを船橋まで陸をすゝめて銚子の五郎水戸の忠三郎例の甚五郎を送りまして茲所に別れを告げて忠三郎も亦た五郎に別れ是より向ふ路へ船で渡つて故郷へ立歸らんと致す然るに茲に銚子の五郎是から銚子へ山駕籠を雇ひ滑川へ歸る途中刻限ゝまだ早ししかしなじみなるに依つて佐原迄來り佐原の佐原屋といふ料理屋へ立寄ましたが茲に一の事件出來のお話し

第八席

女「オヤマアお珍らしうございます能うマア被爲入いましたサア此方へ御上んなさいまし若イ衆さん御苦勞樣といふと帳場よ居た婆さんが年を老ても愛敬を賣る茶屋の婆さんだけなけなしの毛へコテ〳〵油を附けて河童の皿見たやうに冗天窓へ張り紙をして小さなをべこよ結つて振弄物のやうな笄を差して木綿の赤縞の半纏を着て同手織木綿藍の萬筋の地太の綿入小柳の巾を詰たる古ッチヤケた帶を横に結びなけなしの歯へ鐵漿黑〻付け体をゆすりながら婆オヤ宜う被爲入いました、マア親方薩張り私し共を御見限りでございましたねへ、マア此方へお上んなさいまし若衆よお茶をおげな玉ナアに見限りといふ譯でも無へが此等が來ッて餘まり爲にもなるめへ婆又た然んな事を被仰います親方が爲被入いませんと何だか家の巾が利かないやうで往ませんよ玉旨く云ふで年ゝ老ても相變らず反さないねへ中々感心な者だ婆往ませんよモウ只だ和郎御十夜へでも往まするとマア此方へ座つて呉れろお前ゝ下に居てゝ往ない正座ゝお前だなんぞと云れます夫とモウお酒の座へでも行きますとお年役だからお前さんから初めろといふので困ります人間ゝ御年役ゝ困り切ます玉アハヽヽ併しマア何でも先に立つのゝ結構だ此頃ゝ道樂息子ゝ辛抱かね婆ハイ那の野郎も漸やう少し辛抱よなりましたが道樂もねへ親方江戸へでも往て初めるなら宜いが潮來や船橋へ往て田舍女郎を買て浮れて居るのでテンでお前さん人間が駄子ッ外れて銚子の端れへ往て馬鹿をするンですから仕

様がありませんよ五アハヽヽ大きに銚子の評判が悪いな婆イヽエお前さんの調子の宜い方で五忌に宿無しの乭見たやうに口で殺すせマア一盃飲う……マアく阿母さん帳場にお在よ、お前が其所を離れると往ねへ婆ナアに宜しうございますよ、お待遇に参りましやう五インヤ夫よやア及ばねへ外にお客が來ると往ねへ外の客が大事だ俺なンざア我儘者で事に據ると勘定を借りて往くから婆御串戯ばかり被仰つて私し共の方で年中頂だき過になつてる位ねでございます又た何でございますよ來年の御十夜の時にの私の方で萬事マア引受ても立派よしやうと今から手繰りをして居ります其の節にの又親方どうぞ銚子の御連中様を御頼みやますよ五別に爲にもなるめへがお十夜の牡丹餅位のおれが受持よ連中も推挙するよと常談を云ひながら二階へズッと昇りました五アー奇麗になつてるな此所の家の何日も掃除が届いて居て感心だ俺等よの宜かア分らねへが床の軸の巻い軸のやうだな餘ッ程表装も美事だ……チーお夏　なつ親方さんお

出でなさいましそれの表具や仕立てまだ間がないのでございます丁度江戸から職人が参りましたので五ウム然うだらう宜い筈だ江戸の職人ぢやア宜に違へねへ第一圖が面白いどうも芦の工合といふ者が中々かうの書る者ぢやア無へ餘ッ程宜い圖だ枯芦に捨小船……ウム此所に落欵があつたのよ氣が附なかつた立派な物だと思つたらいく筈だ武清の人物や何が能く書くが此ういふ物を書しても旨へ者だなア何かへおなつ家に花をさす者があるか　なつ何ですか去年の冬あたりからねかみさんが初めました五然うかあのばアてきが昨年夏來た時の花と今年の花の活方が餘程違つて來た何でもマア錢を遣つて其の道へ通入らなければならねへものだと見える……ヤアお饒舌をして居る中に酒が出たおなつ家の那のばアてきにも困るなア花の上手になつたがベラ〳〵しやべるに恐れる世二階へ往て御待遇をしませうッて大きな聲ぢやア云はれねへが來られちやア却つて迷惑だ酒の燗魚の氣取り酌のたぼ狸猫婆ア子の出ぬが宜しといつて酒

の場所へ婆アの禁物だ併し其ンな事をいつても俺もモー爺いになるンだ

第九席

なっ「和郎よりゝ私しが婆アになります五馬鹿を云へ俺が爺いよなり切て仕舞ふと汝が年増になる位の者だ是ゝ拙ねへが前掛でも買ねへ　なっ「有難う存じますと前へ置くと五郎斜に見やりて五何ういふ者だか茶屋小屋の女といふ者ゝ貰つた物を何時までも投り出して置て仕舞はねへナア　なっ「さう云ふ譯でも有ませんいたゞきます五コー那の向ふを一寸見ねへ大層人が……アレアノ大變に人が集つてるが那ア何だ……オヤ軍鶏籠がある世駕籠の中に囚人があるンだらう　あっ「ハイ、モー親方さん那は氣の毒で耐へられませんの五ウム何だ　あっ「モー那の話をすると長うございますが眞正に氣の毒な事なンでございますよ五どういふ譯だ　なっ「ナニ和郎お聞なさいましよ此の津の宮に歌次さんと云ふ親方があるのを御存じでせう五「ウム彼れゝ今ま賣出しだ　あっ「彼の歌次さんの所で博奕が初まつてる處

へ御役人が乗込んで參りました處が歌次さんゝ恐ろしい力のある人でございまして御役人を苛い目に遇はして逃ちまつて夫が大變に六ケ敷くなつて此の土地の御用聞も高い聲でゝ云はれませんが清兵衛さんといふ方が被爲入てぢやア歌次の代りに歌次の母親を連れて往かなければならないと云ひまして酷い御話ぢやアございませんか夫を縛つて連れて往くと云ふので年を老てる者だから是が連れられて往けば大變だと云つて佐原の關戸といふ處に居ります元ゝ旅役者で嵐正助といふ其の人が何ういふ者だか知りませんけれども自分の身の上を歌次さんに頼んで歌次さんの乾兒になつたンです處が博奕も何も正助さんといふ人ゝ打つンぢやアありませんが親分乾兒になつてる者だから阿母さんを連れて往なさるならば老年の事でどんな事になるまい者でもないから私を連てッて呉れといふので乃で正助さんが縛られて小手を打て那アやつてアノ駕籠の中へ入られてアレ御覽なさい那所へ來てチイ〳〵泣てるのゝお内儀さんでござ

います元ハ何か江戸の吉原で内藝者か何かして居た人なンでございます
どうしても小粋でございます酷い事をするぢやアございませんかアレ足
で蹴飛ばされて居ります玉ウム、夫ぢやア何か歌次の乾兒の正助てへのが
歌次が逃ちまつたから役人ダ歌次の代りに其の阿母を連てくといふのを
自分ダ代つて往ンだな夫からして違つてちア博奕兇狀で假令役人にぞん
な無禮ダあつたれバとて夫ハ歌次ダ善くねへにハ違へねへダ其の親を代
りに連れて往ッてへ事ハ無へ事だ其の役人てへのハ八州さんか　あつ「ナニ
此の土地の清兵衛さんに煙草盆を叩き付けて逃ちまつたといふ話でざ
います玉「フム、然うかへ併し其の正助といふのハ元役者だッてへが藝人よ
しちやア中々氣性の宜い男だなア　なつ「夫からマアお聞きなさいましよソ
ノ正助さんの阿母さんといふ者が今九死一生なンです夫を只だ正助さん
ハ心配をして居るンですけれども自分の阿母さんの大病の處を打捨ても
親分の阿母さんをやりたくないと云ふので玉「氣の毒な者だなア、アヽ、アー

那んな事をして居やがる女房を突飛しやアがつた見て居る奴も情を知ら
ねへ奴等だワット云つて囃して居やアがる癪に障るなア障子を閉て呉れ
那んな者を見ると無体癪に障つて耐られねへ清兵衛ッてへ人ハ亂暴な人
だなア那の蹴ッてるのも清兵衛だなと言乍ら五郎ハなさけ深き人故障子
を建る　なつ「親方其の穴から覗いて御覽なさいまし玉「如才なく穴から見て
へるんだ　なつ「親方誰にも云つちやア往ませんよ玉「ナニ云やアしねへ　あつ「
全たくハお前さん其の清兵衛さんハ那の正助さんの内儀さんを想ひ附ま
して諸方の茶屋へ引張て往て種々に口説て何といつても云ふ事を聞きま
せん元ハお前さん浮いた稼業の人でございますから直にウンと言ひさう
な者ですが中々言ひませんノ夫が一ッの意恨だといふ話でございます

第十席

玉「フウム、途法もねへ事をしやアがる、夫ハ今いふ通り歌次が煙草盆を取て
御用聞手先ゑ叩き附けて逃げたのハ宜くねへ事だが夫ハ自分が縄ゑ掛る

のを免れる爲にした事だから善くねへ事ゝ知れて居るだらう夫を正助が身代りに出やうと、いふのを宜い機會に私の意恨を霽すといふゝ不埒な奴だ御用の二字を鼻に掛けて弱へ者を苦しめるといふゝ上役人にあるまじき事だ　なっ「夫にお前さん正助さんの身体だッても病上りでございますからウム五煩らつてたのか　なっ「餘程煩らつて居たンです五夫ぢやアマア江戸へ往う者ならバ三日も敲ッ込まれゝバ往生して仕舞ふだらう、アー氣の毒な事だ、酒を飲んでも旨くなくなつて仕舞つた　なっ「とんだ事をお話しヤました五ナアニ宜い話だ、面白い話だ俺ゝ酒を飲んで踊つたり唱つたりするのゝ大嫌ひだ只だ時々痞を治める爲に飲むのだ、勘定をして呉れ　なっ「和郎まだ餘まり早うでございます五然うでねへ是から是非往なけりやア成らねへ所がある那の軍鷄鞦籠ゝ何ンだらう、是から夜通しに往んだらう　なっ「左樣でございますモー諸方に點火が、チラ〳〵見えますが是から往くンでございませう五然うか勘定をいたして裏階子から降て小便をいたし再た

び二階へ昇つて帶をゞめ直して店へ降り草鞋をはき脇差を腰へ手狹んで佐原からいたして陸を行きまするよ依て佐原の町端れの岩崎、此の岩崎より外にゝ宜い場所がない其の先へ往けバ森戸、大戸川谷、中寺、内堀の内、大貫郡村、並木村、大和田、高岡、滑川、木瓜、此の界隈の處ぢゝどうも他に場所がない此岩崎ゝ矢張り佐原の内でございまして、兩方ゝ岩山になつて居る此方にゝ月山湯殿山羽黑山其の他諸々の經陀羅尼を切附けた建石や地藏などがあります、此處で笠を脱て後ろにかなぐり捨て脇差ゝ下緒を以て鞘走らないやうに柄を確乎と結へて冠笠の中へ投り込んで兩手を仕て其處ゝ控へて居る中に佐原町役場と書いたる提灯を携さへ炬火を持たせ先ゝゝ軍鷄鞦籠世に言ふ丸籠に咎人を乘せ所謂る番太塀外と言者江戸の非人でございますが、十三四人廻りを取卷て其の跡から闘八州の廻り方役人(此の闘八州とヤすゝ安房、上總、下總、常陸、上野、下野、武藏、相摸、の八州、其の八州を始終廻つて惡黨共を調べる役が八州方の掛りとヤます、役人松村小三郎山鞦籠ゝ

乘り刀の柄を下にして鞘を肩へ掛けて搗き粧草を履いたる儘で反身になつて小刀を前へ帶して來る用聞手先の者が廻りを取り卷て居る其中に一ト際目に立深澤清兵衛是も沙用聞で此の邊に於て至つて盛んな勢ひでございます其の人の前へ五恐れながら願ひ度うございます 遣下れ〳〵〳〵何を五少々お願ひでございます 遣何を願ふンだ錢貰ひか 五左樣でいでございません少々お願ひでございます、沙駕籠を暫時 遣駕籠を留めろとい何だ恐れ多くも關八州の沙廻り方が被爲入る是へ對して無禮な事をいふ何だ下れ〳〵 五恐れ入りましたが少々願ひ度うございます、エー私しい銚子に住んで居ります五郎と申する者で只今承はれば津ノ宮の歌次が心得違ひから致して上の沙怒りを蒙むりまして、歌次の母が沙差送りになるといふ事に就て乾兒の事だから見乘ねて正助なる者が歌次の母に代るといつて願ひ出ました趣きで然る處此の正助の母い只今九死一生でございます、私じい縁者でも身寄でもなんでもございませんけれども、如何にも氣の毒な

事でございますに依て見るに忍びませんで是へ出ましてございますが、暫時歌次のお手に入りまするまでい正助を沙差送りの儀を沙免蒙りたく且つ又正助母或い歌次の母等も是れ亦沙召連れの儀をどうか沙用捨を被りまして必ず上の沙威光を以て遠からざる中に歌次も沙手に這入ませうで遣ナニ訝しな事をいふ奴だ、上の沙用に依つて斯樣に召連れよ及ぶ處を苦情ケ間敷きことを横合からヤ出るといふい、怪しからン奴だ扨い歌次よ大恩でも蒙むつた者であると見えるな、但しい冷飯の一杯も振舞て貰つたか

第十一席

「どう仕まつりまして、決して左樣な次第でいでございません、聞くに忍びず見るに忍びずして願ひ立てます 遣馬鹿を云ふな召捕つて差送る者を箒棒めへ歌次の代りの正助を呉ろ、どてを押しや其な熱をふく馬鹿なことをいふ奴だ五左樣なれべどうか歌次の代りに正助を沙連れになるなれば其の正助の代として、私しをどうか沙差送りを願ひます 遣半間なことを吐す奴

だな、牢の飯を喰ひたいか　五イヤ　牢内の飯ハ喰たくハでございませんが、正助の母親が九死一生でございますから、秋し嘆願を致します、然すれバ私しが歌次に代りまして代牢を願ひ奉つるのでございます　役人コレ〳〵　清兵衛へエ　役何だ　五イヤ　捕ひなく此ういふのが何所の土地にも幾もございます、道理の分らン藁屑石こつぱ　鉋屑同様な奴等でございます　五恐れ乍ら御役人様へ少々嘆願の者で。此時清兵衛手をついて居る五郎を何を云ふと泥草鞋のまゝ肩をエイと蹴た　蹴られてアッと倒れる所を　清馬鹿めエと痰唾を吹掛けて遂々此の處を往き、去りました、茲で銚子の五郎之を恕つて已れ見ろよと思ひながら、跡見送つて居りましたが提灯の遠ざかるを恨めしげにうちみやり、其儘佐原へ歸りました然るに下總佐原ハ高七千石神田佐柄木町津田鐵太郎の知行所、其の津田鐵太郎の知行所を一般ゑ受持てるのハ例の清兵衛でございます、彼の正助ハ江戸表へ送られまして傳馬町の牢内へ這入ると病後とヤし母の事を案じ彼れ是れ致して遂に十日經た

ない中に牢死いたして仕舞ひました、總て此の牢なぞに居る者ハ親もなし子もなし女房もない至つて氣樂な何事も家の事などの考へのない者ハ壯健でございますが妻子でもある者ハ其の事を案じ煩らひまするに依て是が爲に已れで病ひを惹起して牢死いたす者がございます、然るに之を聞き正助の母親ハ固より大病でございまする、所、尙一層の歎きを增し之が爲に遂々死んで仕舞ひました、此時に歌次の母ハアー面目ない正助どのハ私の悴の事からして自分で代を願つて牢死され其上母までが之を苦に病んで病死いたしたハ誠に氣の毒千万な事とて遂よ漫々たる利根川へ身を投げて是も相果ました、清兵衛一人の無慈悲から起つて正助親子歌次の母までが死去りました、銚子に住める五郎ハ聞て愈々憤ほり已み難くいたして或る夜の事なりしが和田町の家を出て佐原へ來て忍んで居た處が清兵衛ハ用事あつて向ふ路へ渡り居たる處が今夜ハ立ち歸つたといふを聞き、強降の雨を幸ひに夜半の頃はひトン〳〵〳〵と表を叩き、佐原の上宿理智山法

界寺で撞く鐘ハ確かに九ツの鐘邊りハ寂々寥々として偶さかに覗ふ所の犬の遠吠何となく物哀れに聞えて居ります處五親方浄用だ〳〵　内ハイ五一浄用狀を持て來たンだから開けてお呉れ〳〵　内ハイ何の浄用でございます　五上の浄用で來たンだ　内然うでございますかと寐衣姿で女房が起きて參り左りの手で洞燈を持ち右の手にて雨戸を開けました五郎に於てハ草鞋履のまゝ物をも云はずいたして昇つて參りましたから女房ハ驚ろいて　内マアお前さん人の家へ草鞋を履いて昇るといふ事がありますか　五郎ハエイと左りの手にて女房を突退て奥へ乘込ますと清兵衛ハ夜具の間から顔を出して首を差延ばして居る所へ來つた銚子の五郎　五コー清兵衛汝に俺ハ言ひ草があつて來たンだコレ能く聞け世の中に汝のやうな非道な奴ハ無へ博奕因狀ハ其の親がお縄を蒙むる事もなけれバ親の不關法が子にまで係るといふ事ハ博奕に限つて無へ事だ能く話を聞いて見れば旅役者の正助の嚊アを那方此方へ引張つて往つて鏡の無へ國から出て來た凸口

顔のやうな顔色をして色仕掛をしやアがつて其の色の出來ねへ所からして夫を内々意恨ム思ひ表向き浄用と聲を掛けて已れの意恨を霽さうといふ卑怯者箆棒めへ假令どんなことがあつても歌次の阿母を連れて行くといふ事ハ無へ況して其乾兒の正助といふを連れて行くといふ法ハなからう咄にも聞いたらうが正助の阿母ハ夫を苦に病んで死んで仕舞ひ歌次の阿母も利根川へ飛込んで相果たコレ汝の根生一ツから起つた事だそれが爲め今俺が敵を取りに來たから覺悟をしろイヤ何とか返答をしなせへ殊に此間俺を足蹴にしやアがつて痰唾を吐掛た太々しい畜生だ人を見損なつたか此の野郎ヤイ清兵衛何とか云はねへかと一刀を引拔いて胸の邊りへ突き當ました

第十一席

此時母親と枕を並べて居たる十一才ばかりの女の子が周章しく飛出だして姐伯父さん勘忍してお呉れよ親父さんが惡いけれどもどうか勘忍してお

呉れ阿母さんも氣を揉むからどうか親父さんを切るのは止してお呉れと前へ立ふさがり白刃の下をくゝつて詫人ます之を聞て五郎思はずホロリと落涙をいたして五アー決して父親さんを殺しやアしねへ宜く言つたナア年も往ねへで親の事を心配するといふなア感心なものだサアモー親父さんをどうもしねへ清兵衛汝のやうな非道の奴でも此ンな娘があるか世の中ゝ不思議な者だ此の娘ゝ大事にして能く育てるが宜い此の娘に免じて命ゝ助けてやるヲー内儀さん家の中へ土足で昇つて飛だことをした是ゝ少ねへけれと夜が曉たら此の娘に菓子でも買つてお慰目にやつでお呉ンなせへと云ひながら紙に包んだ三兩の金を其所へ投り出して立歸りました五郎ゝ此の娘の爲に氣の張り弓も蔓切れて猛き心も和らぎ意恨も利根の中へ流して仕舞ふことよなりましたが是を聞くや否や常陸邊に隱れて居た處の例の歌次が直に南町奉行土屋越前守正方の役所へ訴へ出で私ゆゑに正助親子も相果て母も水死いたしたと聞き今さら後悔詮方も

ございませんが皆な私し一人より起つた大罪何卒して法通り所刑を願ふといつて歌次が出ました依つて遂々入牢になつて程なく歌次も牢の中に於て相果ました是れに依て此の事を五郎の所へ來て話す者があつて男親方世の中にゝ哀れな話といふ者が幾らもあるもので只た一人清兵衛が酷い事をしやアがつたばかりで何と歌次親子正助親子四人といふ者ゝお前さん死に絶えちまつて可哀想なことをしやアこせへませんか此時五郎愁然として何事を聞いても驚いた事もなければ憂ひも憤をりも見せぬ五郎なれども此の時ばかりゝ稍や暫らくの間頭を垂れて眼を閉ぢ默然として居りましたが五アー氣の毒な事だ汝等のやうな宿小屋も無へ人間でせへ然んな事を聞いて氣の毒だ哀れたといふものを態々然うさせるといふ無慈悲な奴もあるものだ俺も其の事よ就ちやア餘ッぽど骨を折たが遂々俺のいふ事が屈かねへ然ういふ事になるッてへものゝ仕方が無へものゝガ死んだものゝ何うも仕方が無へに依て此の上からゝ歌次正助親子の

提の爲め大施餓鬼をしやうでんないかといふ所が一人どして五郎のいふ事に唾を返す者もないに依て皆な擧つて力を入れ又聞傳へたる堅氣の商人まで喜捨金を出すを木村屋五郎是をかたく斷り自費を以て法事を致し下總國海上郡銚子(是を本銚子町と云ひます)飯沼山圓福寺坂東二十七番の觀世音此寺の俳詠歌ん(此ほどんよろづの事を飯沼に聞もならはぬ浪の音哉)皆な札所〳〵の額へ俳詠歌んあります額の表面ゑ彫刻して金が這入て居る處もあれば又ん白漆で文字だけ現はれて居るのでございます是ん皆さん、俳存じの事、扨芝居か相撲を催さうといふ所が芝居バかりでん嫌ひの者もある事だからと云つて相撲ばかりでん女子供が好ませんからと觀音の境内に高小屋を拵らへて三日相撲三日芝居といふ事ゑ成りました勝手次第に見物をするやうに、と觸れましたる事ゆゑ我も我もと參りました殊更に辨當を一本ヅッ喰はせ流石に酒ん氣狂水と云ふなれバ酒を飲まして夫が爲めに役人衆の手を煩はすやうな事あつてはなりませんと萬事に心

を配り夫々見張りの者を附けて置ました尤も領主松平右京亮樣へ願ひを立てまして夫々手抜のないやうゑ手配りを致しました(銚子ん上野國高崎の城主松平右京亮樣の俳領分なり)花會めいたる人寄せん相成らン去なから佛の爲めとあれば奇特なる事とて容易く免しを得ました事で是に依て荒野荒生本庄松岸高神邊より僧侶ん皆な集ひ來つて經を誦み鉦を鳴らし鈴さん達ん潤聲上て念佛を唱へ相鐘を鳴らし其聲谺に響き海の底にまで徹るかと思ふバり參詣群集夥敷く先づ最初芝居を催はし後に相撲をいたすことに相成ました然りと雖ども多くん世にいふ素人芝居其中ゑ只た一人旅役者で市川福松とかいふ者が頭取にて萬事の差圖をいたします一体銚子ん當今ん一万近くから戸數ゲでございますけれども其の時分ん只今と大きに變つて戸數も少なうでございます是に依ました三日の間替る〳〵狂言をしなければならず初日は忠臣藏二日目が太閤記で先づ二日ん難なく畢りました

第十三席

然るに第三日目ゝ見物の方からお染久松をやつて呉れと云ひまするゆゑ元々無代で見物を入れて人の目を喜こばせ辨當を喰はして歸すのが五郎の望む所ゆゑ然らば其お染久松を演らうとなつた處がお染ゝ銚子の乾兒にして太郎吉といふ者がいたしました、又久松ゝ下手ながらも始終素人芝居や何かへ出て居る中村だか市川だか坂東だか知らないけれども宜い加減に土地の名を取つて利根川を坂東太郎といふから坂東金助といふ是に市川福松が下手でも素人の中では親方株でございますから久松の親爺を福松がいたす事ゝ相成りお染久松妹脊の門松見物の方より好んだことゆゑ女子供ゝ沸くが如くゝ集まり來り甲「ヤア早く來て見せへやア遲う來てゝ見る事がなンねへ此所が明てるから來いやアい乙「コレ馬鹿ア云はつせへ俺の連中がまだ此の所へ大勢來るンだ甲「イヤ誰が見てへのも同じ事たお前等の連中が來るンならお前等が最と跡へ下らつせへ乙「インヤ俺の方

が先へ來て居るンだ跡ゝ下る譯ゝ往ねへお前も客なれば俺も客だと二ツ云ひ二ツ云ひ已に喧嘩にもならうといふ樣子だから銚子の乾兒が乘んで來て男マア〳〵どうか……まだ此所へ這入れるからお膝送を願つて此うして下せへと子供にゝ菓子を遣り泣子が有ても大勢のことなれば我慢して役者も演惡くゝあらうけれども演て貰ひたい咎めたり突出したりしてゝ愛嬌がねへからと万事注意をいたして居りますが見附ない芝居の事なれば何となく只騷ついてばかり居ります其時お染の太郎吉ゝ着附が中形の振袖緋の縮緬ゝ黑縮子緋鹿子の結び下げ頭ゝ島田髷にして一生懸命演つて居りますが根が荒い波風を身に受けて氣も荒き處の人達だからどうで滿足にゝ往ません其所ゝ勘辨しなければ成らんので御座いますが向ふ正面に押合て大勢見て居りました、連中ゝ房州那古からいたして鰹漁の爲に此の所へ雇はれて來て居る漁師にて尤も鰹漁の時分にゝ銚子天津なぞへ那古或は川那船方邊りからして皆な漁師が寢道具を擔ひで稼ぎに參る

者でございます、其の連中が今日ハ海の不漁の爲に業を休んで多勢芝居を見物に來た處ゞ根ゞ物の理解の悪い者だから默つて居ない適ヤイ止めちまへ然んなお染があるゝへ笊棒めへ毛むくぢやらの足を出しやアがつて些とも身体が利うねへ石佛へ着物を着せたやうな者だ体ア見やゞれ出力「お靜かに願ひます東西〳〵」と制して居ると其中に此ンな物ゞ見られるかへと云ひながら突然一ッ投つた茶碗が間が至つて狹いから舞臺へ來つてポーンと二ッに割れた奴の缺が飛で太郎吉の顏に當つてタラ〳〵と血汐が垂ると太郎吉ハ根が短慮の男だから正面をハッタと睨み杰此奴等ア間々にしやアがれ笊棒めへどうで素人ゞやるんだ旨く出來りやア俺ア役者にならア見物の好みのお染久松をしるんだ此な具似をしたから悪いが誰も仕手ゞ無へから據ろなく俺でやつたンだどうで拙いなア當然だ夫も土地の者かと思やア房州の肋骨の足りねへ海猿め何だと思つてやゞる錢を取て見せるンぢやア無へ辨當を只食やがつて芝居を見て巧手も拙へ手もあ

るものけへ夫も宜いや口に吐して居る中ハ免してもやるゞ茶碗を投つて眉間へ疵を附やゞつたらにやア最う勘辨ハならねへから見やアゞれと諸肌を脱いて兩の腕の繃物を現はしました見物ハ驚ろいたの何のと飛だお染ゞあつたものだタリカラモン〳〵を繃て居ると一同ワッと計りに騒立ちまする折しも銚子の子分等ハ面白づくに我も〳〵と立上つて棧敷に居る房州の漁師を引下さうと致しまする中よハ弦張りを破つて棧敷より飛下りて逃るもあり又は梁へ昇つてゝゞみ就て居るのもありましたゞ此方ハ多勢房州の方ハ些かの者でございますから四五人と云ふ者其中で取押へられました五郎が此處に居れば斯樣な事よハなりませんゞ何を云ふよも種々用向もあり辨當なども此方へハ來て此方へハ來ないといふ不都合の事ゞあつては成らんから心を配つて居りましたゆゑ彼の圓福寺の觀音堂の方にハ居ないで本寺の方へ參つて萬事を指揮いたして居りました處へ此の喧嘩が初まつたのでございますから五郎ハ一向知りません里搆

はねへから打殺して仕舞へ、他土地から來やがつて生意氣な事を吐しやアがる、口で吐す中ハ免しても置うが物を投付けやがつた折柄ハ此方も據ろねへから手暴な事も云なげりやアならねへ　乙海へ投り込め　四イヤ頭を叩き割て仕舞へ　丁梶柄を持て來いやアイ　甲イヤ梶柄にハ及ばねへ　毆り殺して仕舞へといふ其中に一人銚子の子分で年長の者が出まして　○マアマア然んな事をするより此奴等の國へ持て往てはかして仕舞ふ方が宜い　此場で打殺すより然うしろと生捕つた者をグル〳〵卷にして漁船に乘せて下總から乘り出だして態々安房國江見浦へ持て參り海岸へ投り出して一同歸りました

第十四席

然るに朝早く海草を採りに參りました子供が是を見付て俄かに驚いて此の趣きを宿へ歸つて親達へ告ると二人來る三人來る十人來ると云つたやうな譯で追々其所へ人が集り來り名主の處へも沙汰をすると江見の名主

の幸右衛門も來り繩を解ひて段々事の次第を取調べて見ると　甲實ハ私達ハ罪を働らいたものでなく、口から高野とハ云ひながら銚子の五郎の子分めらに此ンな目に遇ひました幸お前等ハアノ何ういふ事で此な目に遇はされたんだ　○イヤ名主どんが此の中に居さつしやるか知りませんけれど幸イヤ俺が名主だ　○ヘエ左樣なれば旦那さんお前さんにお咄し申上ます　甲私達が私等ハ皆んな那古や船方川那の者でございます銚子に鰹漁があつて十年此方の大漁といふ話だから、どうも此の西方の方は此節薩張り漁がございません東の方へ魚が大層見えるといふ者だから態々彼方へ稼ぎに行きました處が何かの法事があるんで觀音樣で相撲に芝居がおつ初まつたから見に往た處が只も見て居られねへから酒を喰つて一人り二人り……私等が云つたンぢやアねへけれども無駄口を吐いて面白く無へとか下手だとかいふ事を云つた處から此ンな目に遇ひました幸其他の者ハ何うした　甲是ハ皆な何處を何う逃たか逃て仕舞ひました私等ハ跡に殘つて貧乏閑

を引て飛だ目に遇ひました幸併しお前の方にも能くねへ事があるんだらう然ういふ處へ往たら神妙にして見て居れゞ何の仔細もない事だ男夫が其私等の云つた事ぢやア無へので又た他の奴が云つたにしろ其奴が云つたンぢやア無へ酒が云つたんだ幸夫がお前が解らないのだ酒とゞかりいつて勘辨して呉れゝゞ此んな事よりならねへのだ何條にも彼條にも此うなつて見れゞ仕方のねへ事だマアお前等の所へ送つてやるから今夜ゝ私の處へ泊つて家へも使ひを立つてやると名主幸右衛門の取扱ひにて村の衆イ者等を呼んで火を焚て冷氷つて居る者を温ため別段よ衣類布子などを着換させまして手當を致しましたが何をいふにも遠々の海を是まで渡つて海岸へ投出されたのでございますから粥を食はして醫者を呼び手當をして段々聞て見ると○私等は那古の初五郎の子分でございます幸何やの初五郎といふんだ○ナニ那古へ行て初五郎と云やア知らねへ者はありませんどうぞ彼方へ沙汰をして呉らッしやれ、ダガ私等にも嗅アもあり、餓

鬼もある此奴等が聞いたら定めし驚ろくんだんべいと思ひやす幸イヤ夫はお前達が隱して居たッて始終隱し切れる者でもないからマア、打放して話をするより他に仕様かない俺の方で書面よ認めて云てやるからと直ゝ此事を那古へ知せるが否や那古の方より致て是を引取に參まして跳も山駕籠へ乘て連て參ました折しも初五郎は浦賀邊から立歸ましたが元來此漁師計が子分といふ譯にもあらず我住居から致て二三里四方の處の者は大概初五郎の子分ならざるゝない位の者で餘程跋扈致した者でございますさりながら初五郎ゝ所謂沈勇と行て表よ強ひ處を見せずして意が確然して居りますから之を聞ても何とも云はないで只だ氣の毒とばかり云つて居て其の妻子や何かにも夫々金を配當して又た其打毆された者にも夫々醫者を付て手當をして置きました此方ゝ銚子の五郎今觀音の境内に於て間違ひがあるといふ事を聞きまして已れが會主の事だから是から大きな事でも出かした時よゝ一大事と思つて脇差を手に引提げながら常に變

つて血相變へ走り來つて見ると見物ゝ東西に奔走し芝居ゝ何時か打出しになりました

第十五席

五「何だ是ゝ何うしたんだ　子分「マア親方是々の次第でございます五「篦捧めへ途法もねへ事をしやアがる巳等に喧嘩をさせやうと汝等を勦めて斯ういふ事をした譯ぢやア無へ況してや土地の者同志の喧嘩ならば直に膝を抱て笑ふといふ事もあるが可愛想に他國から來た者なら猶待遇てやらなけりやア成らねへどうせ相撲を見やうが芝居を見やうが強いとか弱へとか下手だとか上手だとか云ふのゝ當然の事だ夫を篦捧めへ子「イヤ然うではございません舞臺へ茶碗を投げました五「何を投付たにしろ怪我をした者があるか子「怪我ゝしないが夫がお前さん原因となつて大怪我でもした時にやア何うします五「篦捧めへ怪我になるといふ奴がある者か怪我をした時にゝ其の時の扱取ひもある者だ宜く然ういふ者にゝ悟して何故意見

を云つてやらねへのだ途法もねへ何所の者だか知らねへが子「イヤナニ房州の西方の者だといふ話でげす五「房州だッて名も知れねへやうなもので困つた者だなアマア何うか聞出した上で相當の手當をしなければならねへ飛だ事が始まつた跡をやつて呉れといふ者もあるがモー是ぎりで跡はやらねへと悉とく不興の体にて小屋を取崩させ何となく五郎ゝ煩ゝしく思つて居りますと七八日經てから不圖五郎の家へ二十四五になる一寸した男がやつて參りまして男御免なさいまし私しゝ願まれて參りましたがッヒ此の松岸の者でございます房州へ此間中商ひに參りました所が此方へ往たら是を届けて呉れと頼まれて參りました差置でございますからと云つてソコ〳〵ゝ手紙を五郎の家へ投げ入れて參りました家の者も別段に氣も附かぬ禄々挨拶もせぬ中に踵つて仕舞つたから其っを五郎の前へ持て來て○親方斯ういふ手紙が參りました五「ウム何ンだ下總國海上郡銚子飯貝根木村屋五郎親方樣裏を返して見ると房州那古初五郎方としてあ

りました玉ハテナ名前ハ聞き及んで居るが初五郎と云ふのは高名だがまだ出遇つた事も無へ尤も此間香取へ高小屋を掛た時に列んだ小屋の中に初五郎といふ人の名前もあつたが大方其の御人だらう何の書面であるかと首を傾け稍暫らく考へながら封じめを見て頻りに五郎ハ考へて居るといふは逆封じゐなつて居ります心得ざる事と存じて開いて見ると果して果狀手前共子分宜しからざる事とハヤながら元より取るに足らざる漁師共御地へ參つた者を甚たかに打擲して繩目に掛て我國に持て參つて投り出されて見れバ如何にも面目次第もない良しからざる事なれバ何故其の地へ留めて置て沙汰をして下さらない同じ國の東の江見へ持て來て投り出されて此地の者といふ事が知れて見ると同國なりとは雖ど江見にまで恥を曝さなければならない目指す相手ハ其許御一人依て御苦勞ながら上總の勝浦まで御出張を願ひたい尤も岡勝浦の一文字屋に於てお待受を願ひたい手前跡より右の一文字屋へ出張いたし人交へを致さないで貴公様と手前と御談判を致して命の取遣りを仕つらうといふ文面五郎ハ誠に穩便の人でございますから聲を揚て讀んだ譯でハないから已れで只だ覺悟をいたしクル〳〵と卷た手紙を懷中いたしました女房の聲として玄お前さん何でございますへ玉ナニ此間の香取の事に就いて種々小屋割の宜い所を取つて呉れて恭けないと云ふ禮狀が來たんだが態々氣の毒千万な遠國他國から來て詰らぬへ間違ひがあつた計りで皆さんに無益を掛て此ンな禮狀を貰ふと氣の毒だ時に汝に話をするが善い夢ハ早く話せといふが昨夜俺ハ有々と日蓮樣のお姿を拜んだ其日蓮樣が釋朴の日蓮樣でなく願滿の日蓮樣で御經卷を開いて讀で御爲入た所だ大体ハ釋朴の方が多いんだが御經卷を開いて讀で御在なさるのハ小湊の御祖師樣より他にハ此近邊にハ無へやうだ俺ハ宗旨ハ違ふけれども日頃から信心をして居るに據て其の日蓮樣が夢枕ゑ御立なすつたのハ何か俺の身の上に凶事でもあるから氣を付ろと云ふ事と思ふから思ひ立たが吉日だから明日俺ハ小湊へ

参詣をして來るらか然う思つて呉れ

第十六席

女「お前さん然んな事を云つても用が幾らもあるぢやアないか五「用ハ年中ある其用を那方し此方して居ると何處へも出る事ハ出來ねへ是非俺ハ往て來なければ成らねへ女「夫も然うですねへヒョッとして飛だ災難でも食て自分の事なれば兎も角人事や何かを持込まれて見ると迷惑な事だから夫ぢやア往て來るが宜い五「ウム往て來やうイヤ斯うと明日ハ佛滅だ今日の方が日が吉いから今日往う女「モーお前さん正午過ぢやアないか五「ナニ宜い今から出てポッ〳〵往う女「誰か家の野郎共をお連れなさるか五「ナニ供や何か入らねへ信心と云ふ者ハ然う大形にして往く者でないから却つて質素にして往くのが宜んだ家の者も能く跡々の處を……チー誰か墓所に居ねへか子分「ヘエ五「今此の通り俺ハ誕生寺樣へ參詣よ往くから留守中汝等ハ氣を附ろ又家で三文掛の惡戯をしやアがると聞ねへぞ世間樣へ手

を掛るやうなゴタ〳〵した事をするな已に此間見たやうな事があるから酒を飲ても氣を附ろ喧嘩をする爲の酒ぢやアねへ結ばれた氣を解き疲れたる身体を補ひ面白可笑く飲む酒だ其の酒を食やアがつて喧嘩をしたり往來に打倒れて人樣の厄介になるなどといふのハ面目次第もねへ事だ能く皆な氣を附るやうに然う云ひねへと五郎ハソコ〳〵よ支度をして豫て己れが嗜なみの井上眞海の一刀を打迄んで是より飯岡道沼上總水戸下總木戸是等の地を段々に打越してやつて參りましたが何を云ふにも御存じの九十九里の濱今ハズッと岡の方を人力にて參られますが前にハ涙打際の海岸を參りましたに依りまして砂地ゆへ跡房りばかり致します。どんなよ堅く〳〵たる草鞋も解掛り草鞋と足袋の間に砂が這入りまして思ふやうに足も運べませんされバと云つて涙の近い所に寄れバ足も濡れ足袋も重くなり殊に滔々たる涙が打寄せて參りますから砂場を參りますが砂が深く何うしても道が捗取りません漸々の思ひで上總國夷隅郡岡勝浦一文字

屋といふ其頃第一等の旅屋でございますが此の處へ參りました門口にゝ浪花講具誠講或ゝ江戸向から致して極め置きましたる所の宿札がぶら下り小淺講中だのヤレ江戸講中おどと云ふやうな洗手手拭やうな物がいろ〳〵其處にぶら下つて居ります景氣ゝ一際勝つて居ます甲「イヤ御早うございます、お草臥樣で此方へお昇んなさいまし丑「イヤ一人旅でげす、追ふく跡から來ますが侍厄介になります、亭主が帳場格子の中より出て參りまして亨「是は〳〵能うこそ御爲入いました、有難存じます、毎度御贔負を頂きまして丑「イヤ飛だ御厄介みなります私ゝ誕生寺へ參詣よ來た者でございます亨「然うでございますか能くマア被爲入いましたお日和が打續きまして此の鹽梅なれば侍道中も結構でございます丑「ナニ私ゝ銚子でございます亨「へー左樣でございますか大層彼方ゝ此間內ゝ侍漁があつたやうで丑「アー引續いて宜い鹽梅に寄りがありました亨「夫ゝ結構でございます同じ海でも此の勝浦ゝ此節何うしたんだか鰯子一疋獲れませんで漸やく昨日邊り、

かちチラ〳〵見えて參りました丑「ナニ天下ゝ廻り持で一ツ海だから一ツ所にばかり居へね者でございます扨私の連中が來れば二三十人も來ます其時にゝ又た廣い座敷も願ひますが先づ私ゝ狹い所で宜うげすから表の見晴しの宜い所へやつてお呉んなせへ亨「畏こまりましたコレお鍋やおニ階へ侍案內ヤして前の町の見える所が宜しうございますな丑「アー其の方が宜うございますと二階へ昇るが否金を紙に包んで丑「是を帳場へ出してお呉れ、是ゝ姉さん餘まり少ないけれどもお前さん方で割賦してお呉んなさい。凡て旅籠屋へ泊つたら茶代ゝ早く出す者でございます中にゝ立つ前になつて出しまするゝ是ゝ全く無益錢と云ふ者で旅の耻ゝ掻捨だとヤますけれども聊さかでも置くなれば早く置くに限ります是がないと小便臭い嗅ひのする所の座敷へ投り込んだり階子段の昇降の烈いし所が車井戸の音のする八釜敷い所へ寐かして布團でも枕でも眞黑の物をあてがはれて萬事其の待遇が違ひます夫に依て何處の旅籠屋でも先づ泊れば一寸奇

麗な座敷へ連れて往た者でございます

第十七席

乃で帳場でゝ茶代が出るか出ないかを少々呼吸を計つて居て最う出すべき時分に出しませんとお氣の毒樣でございますが浮出でがなからうと思つたお客樣が又た浮引戻しになつて先に此の浮座敷へお泊りになつた浮方でございますから、どうかお氣の毒樣でございますがと外の座敷へ替へられるやうな事がございます其邊ゝ苦勞人の事でございますから、云はれるまでもございません、皮を剝て見れゞ銚子の五郎併し一文字屋の亭主ゝ堅氣の人と見えて未だ五郎の顏を存じません、只だ法華宗門の者が誕生寺へ參詣よ來たとばかり心得て跡から來る連中を心待ちよ待て喜んで居ります中に翌日翌々日となるが毎日のやうに澤山も飲まないが少しづゝの酒を飲でゝ表座敷の手摺へ倚り掛つて往來を見て居ります、第三日目の夕景の事太陽ゝ已よ海原へ光りを殘し今日の日も漸やく暮れなんとする頃

はひ江戸から廻つて參りました處の住吉踊り周圍を大勢で皆な土地の者が取卷て見物をして居ります、漁船が今沖から歸つて來たと見えて跣足の者が多く大漁の祝着を着まして周圍を取卷て居ります「遠州なア、濱松ア廣いやうで狹い……」と竹を持て傘の柄を叩きながら頻りにワイ〳〵云つて丁度今船の着た所を的込んで演かして居るのを一文字屋の二階から餘念もなく見て居た五郎折しもあれ笠を手に引提ながら二階をヒョッと見上げた一人の男ゝ年齡未だ二十代手織木綿の堅縞の袷に黃木綿の濕袢花色木綿の半股引目暗縞の足袋に脚絆樺と白の手綱染の三尺を小倉の帶の上から確乎とゞめして銀の銅鐵打たる一尺七八寸もあらうといふのを帶して、一文屋字の店へ這入り男浮兎下さい亭「浮出でなさいまし男エー私ゝ今夜浮厄介になります亭へー被爲入いまし毎度有難う存じます、何方樣でございますか男ナニ私ゝ房州でございます亭アー左樣でございますか能う被爲入いました東でございますか、西でございますか男銚子邊まで參りま

した者で亭アー左様でございますか此方へお昇んなさいまし男アノ一寸お聞きヤますが銚子から此方へ來てお在なさるお方がございませんか亭ヘエ…子ー金兵衛やアノ銚子からお出でなさるのゝ表二階のお客様だのう金左様でございます、アノお客様ばうりのやうで亭然だなうおきん　きんハイアノ誕生寺様へ御參詣のお方でございます亭エーまだ跡から御連中が來るからと云つて御逗留でございますが未た誰公もお出でがございません男夫ぢやアちつと違つたり何歳位ゐの人でございます亭左様でございます、三十か最些と上でございませうゝ下でございますう……亭主も義え切れない挨拶をして居ると男一寸其のお方を私が隙見をしてへ者ですが實ゝお前さんの家でお出遇ヤす約束をしてあるので亭左様でございますか夫ぢやア此方へ其のお方をお呼びヤしても男イヤ〳〵何うして此方へ呼ぶ抔といふ然んな事ゝ出來ません、ヒョッとして違つた御方だとヤ譯が無へ一寸往て様子を見ませう、御免下せへと階子段を昇つて往くと障子

の上の方が少し口を明て居るから夫から覗いて見ると扮装ゝキリッとして今まで二階より下を見て居りし人にて、ヤートコセーも濟ました者と見えて布團の上に胡座を掻て毛抜きを取出して髯を抜て居る様子を見て男姉さん大きに有難う……御免なさいまし、貴郎様ゝ銚子の親方ぢやアございませんゝ五ハイ恐れ入りますが、貴郎ゝ那古の親方でございますゝ初左様初五郎でございます五イヤお待詫ヤして居りました

第十八席

初私も疾に出なけりやア、ならねへのでございましたが大きに延引して相濟ません、さて是まで御出向を願ひまして私も是まで參りました事ゝ外の事でございませんが、兼てお覺えもございませう私の土地の者が御地へ參つて何か良くねへ事をしやした處が夫をお憤ばりで撲放しまして私の國へお連れ下すつて一ッ國とゝ云ひながら、所の違つた江見の浦へ放り出されて往かれて見ると私の土地の耻辱が他々へまでも響かなけりやアなり

ません船に乘せてお連れ下さる位なら私の土地までお送り下すつて次第
柄を一通り仰しやつて下されゞ其やうに取計ひ方もありました、殊に其の
野郎共の家にゝ親もあれば子もある人達が多くでせへやす、私も親分子分
と成つて見れゞ滿更聞かぬ姿をして居る譯にも往きません、據ろなく失禮
ながら貴郎へ手紙を差上ました無禮の文面もでざへましたらうが田夫野
人の私等ですから御免なすつて下せへ、私の土地まで御出で下さいといふ
權式もなければ又た貴郎の方から來いと云はれる弱身もでざへやせんか
ら丁度何方からも出た眞中の此所まで出張てお貰ひヤし、此所で御趣意柄
を承はらうと思つて參つたのでげす、私は昔から人を中へ交へて喧嘩口論
する事ア嫌ひでげす、其許樣の御存念を承はつた上からゝ錢金ゝ固より欲
いといふやうなしみたれの事ゝお前さんもなければ、私チもでざへません
依て其許はんの素首を貰つて、打放された野郎どもの女房や親に是を見せ
て悅ばせてへばッかりで此ういふ事に立入たんでざへやす、五イヤマア

那古のお急ぎなさるな、初急ぎやアしません、五失禮ながらお靜かに願ひた
い貴郎の御書面があつたれゞこそ私も此所まで出向きました、家の奴等に
聞えねへやうに小港の誕生寺へ參詣するといつて家を出て來た位ゐ此家
の亭主に聞いても解ります、元々此の家で事をしやうと云ふ事もあるめへ
貴郎のお胸を伺つて此場を立出で山深へ奥へでも往て話をするものか、又
た夜の曉ぬ中に海岸へ往て話をしやうと存じて私も是へ出向たのでざ
へます、言譯をするのぢや、アでざへませんけれども私が心得て居て撲たし
たの船に乘けて江見の浦へ投り出したといふ事をさせたのぢやアねへ跡
で承はつたので是が爲め其の能くねへ事をしやアがつた奴ゝ片ッ端から
致して夫々に處分いたしてあります、然る處へ御手紙が來て見れば出向か
ねへのも卑怯なり、殊ょ貴郎に對して無禮ょ當るから夫に依て是迄出向い
た譯夫で貴郎の思召しゝ何ででせへやすか、私の首を何處までも持て往て
撲たれた人達の親や女房子供に見せてやると被仰るのでざへますか、四

如何にも其の心得でござへます五夫ん上ても苦しくんねへが私んまた此ンな事位ねでお前さんに首を扱かれるやうな次第もなからうかと思ひます併しお顔の立つやうにしなければならねへから私の命ん惜かアでせへやせんが首を持て往た處がアー宜い心持だといふばかり然んな野暮な事を被仰らねへで行屆かねへ處は何のやうにも仰せに從つて直切り小切りい致しやせん右から左りへ金を揃へて上げやすから何うか示談にしておくれ貰ひやてエイヤ勘金といふ事ん三文さなかお前さんの方からお貰ひやさうといふ譯ぢやアでせへません私に對して事をなさるも同樣の事柄だから依てお前さんと私と命の取り遣りをしやうと斯ふいふんだ五夫んお話しの行違ひで決して言譯をするんぢやア無へが私が差圖で右樣の眞似をさしたなら尤もの事だから仰せ通りにもなるが知らねへ事を横頭方から持て來て其のやうに云はれてん私も甚だ迷惑の事だ併しながら人を以て掛合ふの書面を以てヤ上てん失禮だらうと思ふから夫で私が出向きました

地頭代官から呼びに來ても、オイソレと往つた事の無へ私でせへやす、夫を此郎はんから懇ろに被仰つたから此の邊まで出向いて顔を立たからモー是でお前さんの顔も立てるぢやアねへか、然うして見れば跡ん子分衆の怪我をしなすつたとか身体が利かねへとか云ふやうな話もあるだらうに依て夫ん其のやうに手當をして上るとも、何うするとも仰せに從つて私の方で趣意を立たら仔細もありますめへ

第十九席

初「イヤ御尤もの次第でござへます然う被仰れて見れば御尤もだが私ん元來生まれ附ての一徹短慮已れから短慮と云ふなア我儘者のやうに思召すか知らねへが親の代からどんな事があつても金づくで濟ました事の無へ男でござへますマア謂やア御高札の裏を往く處の不職渡世表向ての家業と云つてん出來ねへ事動ともすれば詰らねへ處から互ひに血を見たり見られたりするといふのが持前で斯樣に私もお前さんにヤ上たが今一々貴

郎の御理解を能く考へて見ると如何にも御尤もに存じます私の口から致して是だけの手當をして呉れと相場を云ふ譯にも往やせん私ゝ扱ひに來たんぢやアでせへませんお前さんに其の趣意柄を聞きに來たんだ此後とても貴郎の方の人達が私の方の濱へ來た時に此ンな間違への無へやうに私も氣を附るがお前さんの方でも旅他國の者と思つたら一歩譲つて勞はつてやるのが今日でぜせへやせう子分子方の手前へ對して引込んで居る譯よも往ねへから斯くまでにしたんだナニ心底親の敵ぢやアなし夫もお前さんの出やうに據れば命も貰はなけりやアならねへが然うお前さんが柔かく出て私チ等のやうな青二才野郎を立て下さる思召ゝ千万忝けなふ存じます斯う話が折合た上ゝ一杯やりやせう玉イヤ然う捌けて下さりやア千万忝けねへ是から別段に懇意にして怪我をした人達の恥辱も雪ぎ其の方々の手當ゝ今此所で云ふまでも無へがぞのやうにも私が取扱ふから決して御心配ないやうに、乃ち初五郎ゝ手を打て女を呼び初アー何か出來

合た物があるなら持て來て呉れ　女只今船が着たばかりで鰹が澤山ございます　初夫ゝ何よりも先お方よ鰹を上るのゝ珍らしくもねへがマア〳〵濱方でゝ鰹が獲れりやア鰹ばかり鯖が獲れりやア鯖ばかり有合せの物ばかりでどうも仕方が無へ其中に酒肴を持て參り互ひに猪口の遣り取りをして美くしく話して居る中ゝヒョッと五郎が傍に置た長脇差へ初五郎目を附て見ると赤銅七子に金にて瓜の中に四ッ目結の紋が附て居ります初甚だ失禮な事をお聞きヤすやうだが銚子の親方其のお腰の瓜の中ちに四ッ目の附いて居る御紋ゝ夫れゝ何でぜへますか貴郎の御家の御紋でぜへますか玉左樣でぜへます是れゝ元と先祖といふと長い事のやうでございますが傍チより二代ばかり前に浪人をいたした者だが房州館山の陣屋で稲葉兵部大輔の家來で木村一郎と云つたものでございます館山の家を立ち退いて流れ〳〵て銚子の端まで參りまして手習師匠をして荒野といふ處へ來て暫らく足を留めました其の孫ゝ當る私が此の通りのヤク

ザ野郎仕様の無へ野郎でせへます、型へエー、さてゝお前さんと私とゝ同家でせへます、私の親父の言傳てにゝ稲葉兵部大輔の浪人まして木村一郎二人の子供のあるのを一人連れて銚子の方へ往たといふ話し其一人を那古の那古寺といふ寺へ預けて小坊主にした處が中年から坊主を嫌つて還俗をして濱方へ出て漁業などをして博奕を打ち酒を飲み落魄を買ひ種々な眞似をして居ました處ろ其の悴といふ者ゝ至つて物堅い人間で。如何なる日でも鋤柄又ゝ鍬柄を手に握らない日ゝ一日もなし其の又悴に私見たやうな破落戸が出來ました依て木村初五郎といひ家の紋も瓜の中に四目是を御覽なさるやうにと長脇差の柄を揉皮で巻てあるのをグル〳〵と解きますと下にゝ鮫柄にして金の出目拔の瓜の中に四目が附て居ります

五「夫ゝ不思議な事で然うして見るとお前さんと私とゝ兄弟共云ふべき從弟同志不思議といふも餘りある事でと酒を止めて……オイ女水を些とばかり持て來て呉れと水を取寄せ互ひに口を洗いで大きな盃を取寄せて兩人とも二の腕を聊さか切て血汐をしぼり此所ろに於て鮮血をすゝり合ひ改ためて兄弟の中になつて仕舞ひましたゝ自然の奇遇不思議といふも餘りある事で却さて銚子の今夜ゝ此所へ泊つて緩くり話もしやうが明日私ゝ歸らなけりやアならねへ全体マアお前の方が兄貴だから兄貴の所へ尋ねて直に是から同道して往なけりやアならねへンだがヒョット是へ來る事を跡で聞及んで家の若へ奴等や土地の者が加勢だの助太刀だのと大勢出られて此所に居る事を知らねへで銚子の土地へでも往て間違へでもあつた折柄にゝ大きに困るから陸を往けば私も見い〳〵往くから留もするし名主もあれば組頭もあるから通しめしめへが船で出られると夫が知れねへから些とも早く那古へ歸つて其豫防をしなけりやアならねへ

第二十席

五「尤とも千万な事だ私迚も誕生寺へ往くといつて出たが嗅アや子分の者へでも万一此の事を話して又た押出されて來るやうな事があるとならね

へから然ういふ事にしやう、と茲で翌日になつて打別れて故郷へ立歸る、然るに五郎ハ銚子を差して參るが勝浦を立て川津、津倉、新川、部原、御宿、岩和田岩舟、笈、矢差堂、小濱を越え是より三里の間洲浦よりして太東より九十九里、矢差ケ浦砂原にて十八里飯岡までございます、追々來る中に眞船まで參りまするとと湖月夜よしてドンヨリと波も雨を催はして居るから海も平らにしてドチードヽヽヽ、雲りと見えて漁船も更に海上に見えません、里にハ燃草を焚く所の煙りが軒毎に立て居ります濱の砂場を離れて砂山を一ツ越ゆると向ふにある松の樹の枝に腰帶を掛て今や一人の女が首を縊らんといふ樣子をバ見兼ねたる所の銚子の五郎是を助けんものと拔足をしながら往ましたが砂地の事だから然う音もしません全体身投だの首を縊る者ハ決して遠くから聲を掛る者ぢやアございません聲を掛れバ向ふでハッと思ふから其の途端に縊つて終つたり飛込んで終つたり致しますから是ハモー密と往て押へるのが第一又た此方に心得がなければ身を投る者や

何か惡くすると共に中へ釣込まれる事があり又た留めやうとして其の人の身体を引張て無理に殺すやうな事がありますから餘程兼合を能くしなければならん者で然るに根が大兵の五郎の事だから大手を擴げて後から今しも踏臺をして首を縊らうとした女を突然抱留めました五心得違ひをしちやア往ねへ、お前何ういふ者だ首を縊つて死なうなどと何れ思案に餘つて死ぬ氣にもなつたのだらうが何ういふ譯なんだエ、女ハ只だ羞かしいのと悲しいのに面目を失ひ砂原へひれ伏してワッとばかりに泣き出だし物も得言はぬ有樣に五何うしたんだ、ウム誰も此の邊りに人ハ居ねへから決して心配するにやア及ばねへ私ハ旅人で通り掛つて此のお前の有樣を見て打捨て置く譯にハ往ねへから斯うやつて留たんだ、何ういふ事だか留るからにハ滿更お前を突放して跡ハ勝手にしねへ然ういふ譯なら縊るが宜いとハ云ねへからどうか話して呉れるやうに、オイ姉や何したんだ泣ねへで云たが宜らう、女ハ砂の中へひれ伏ましたから顏へ砂が附て何の事ハ

ない日蓮樣の御難の牡丹餅見たやうな有樣漸々其顏を擡げまして袖にて涙と砂を拂ひフト見上ましたる處の俤しを見ると嬋妍窈窕たる處の佳人鄙に稀なる美人にして殊に手爪先も尋常にて至つて柔細の女子銘仙の小袖に唐繻子と紫縮緬の腹合せの中古の帶をまして八丈擬ひの黃ばみの多い前垂を掛まして頭にハ柘植櫛の齒の細かいのを眞正面に差し銀簪を一本差して居ります如何にも跌足で出て來たと見えて履物ハありません女一エー面目次第もございません妾しが心得違ひを致しまして成程お叱りを頂いて見れば外に分別の附け方もあらうと思召すでございませうがッヒ此の……と後の方を振向きながら指しました見れば魔火の影に見ゆる藪葺でハありますが至つて棟の高い家がございます其の家の前の所が往還と見えます妾アノ向ふの燈火の見えます所ハ柏屋と申しまする旅籠屋でございまして私しハ其所の召使はれて居る者でございます五ウム夫で何うしたんだ妾ハイ斯樣な事を申まして御はもじうございますが父ハ

上州高崎松平右京亮家來佐木藤右衛門と申まして私くしハ雪と申ます父が仔細あつて高崎家を浪人致しまして漸々に難澁が打續きまして母も昨年相果て父も引續いて死去りました所以前江戸に居りました時分に召使つて居つた家來で淺草田原町二丁目ゑ當時ハ日傭を取て居ります久右衛門と申す者がありまして至つて此者ハ實情の深い者でございまして私しの父や母の死にました時も參つて種々世話をして呉れ先づ兎も角私しの家へ來るやうにと申して久右衛門の所へ引取られて居りました處其の久右衛門が喘息が持病でございまして其中に何を申すも追々年を取て居りますから種々餘病が出ました是が爲ゑ借財ハ追々嵩んで參るし藥師の代や何かにも差支へ家勝手の惡いのが見惡うございますから同じ長家の人が片貝といふ此の隣り村に懇意な者があつて九十九里ハ漁があると宜い所だから茶屋旅籠屋へ奉公でもしなさるやうに久右衛門ハ長屋中で世話をしてやらうと申しますゆへお金の才覺ゑ困つて三兩借りまして柏屋源

之亟とヤまする旅籠屋へ參つて勤めて居ります

第廿一席

五「ウム夫ぢやア何かへ其の久右衛門といふ人の爲に國を離れて浪の暴い物言樣も疎暴の此んな所へ流れて來なさるとン氣の毒千萬な事だ失禮なお話だが家來と云ふ上からン親父さんン云はずと知れた槍一本の武士承まはれバ胸が一杯になりやす、シテ何でお前さん首を縊んなさる雪左樣でございますお差かしうございまして……五ナニ恥かしい事ン無へ何うしなすつたんだ雪ハイ此の村内に龍卷の半五郎といふ人がありますスタ二名雷の半五郎ともヤますモー忌な奴でございまして強い事ン恐ろしい強うでございます此の邊で人が厄病神のやうに嫌つて居ります八州樣とかいふ役人樣方も此の者にン手を附る事も出來ないやうな奴だといふ話を聞て居ります宿へも飲に參りますが餘程機嫌を取て居りますのでお客でも優しいお金のある人ゑン貸て呉れ〳〵で引掛けて就中亂暴な人でご

います五夫が何ういふ事に成つたんだ雪其の人が私しを捕へて種々忌らしい事を被仰いまして驚なすつたら解りますが粟のイガへ目鼻を附たやうな人で怖かない人でございますから私しン傍へ寄りますと慄へ上る程忌でございます私しも父ン可なりにして居りました者で不僥倖ゆへにうとまでンまだ思ひません如何にも殘念に存じます五ウム然んなら其の次第を一々柏屋の亭主に話て迷惑だから串戲を云つて呉れないやうに先方へ云つて貰ひたいと話たら何ういふ者だ雪夫ンモー私しも度々旦那ゑ話ましたが此の土地に居てン那の人の云ふ事を背けバ酷い目ゑ遇うから忌でもあらうけれども機嫌を取て無理を云はれても必ゑ從つて呉れないと私の家の家業にも拘はるから何うか賴むと斯う主人もヤします五惟量下さいとワッとばかりに泣出だしたから五然んならバ早速江戸へ歸るやうに主人へ道を附たら宜らう雪五意でございますけれども實ン私しも逃

出した處がモー皆な手が廻つて居て中々逃る事が出來ません寶ゝ二度逃出しまして一度ゝ是から三里ばかり隔ツた所で取押へられまして柏屋の家へ引戻され一度ゝ此の海岸を參りました所が佐久田といふ處で捕へられました、モー何うしても死ぬより外に致し方がございません五「夫ぢやア何か、へお前を强姦でもしたと云ふのかへ異イエ何うしても私しゝ心ゝ從ひませんけれども是非明日ゝ表向柏屋へ掛合を附て引張て家へ連て往と斯うやして居ります五「夫ゝ誰が異其雷樣が五「ムム飛だ雷が舞込んだ者だ世の中にゝ無法な奴がありやアがる者だ宜うがす私と一緒にお出なせへ一通り私が掛合て上るから異エー參れゝ又私しが酷い目ゝ五「イヤ口を利くからにゝ一寸も跡にゝ下りやせんよ私と一緒にお出でなせへとお雪を連て來て見ると揚戸が一枚下て居て其上ゝ障子になつて淫旅人宿として隅の處に丸に三柏の紋が附て柏源と二字がございます少し淫免なせへ異ハイ何郎でございます五「一寸淫免を蒙りますといふを見ると見馴ない長脇差を帶て居る人でございますから異「ヘエお淫相憎樣でございますが今晩ゝモー一遍お泊りになりまして誠にお氣の毒でございますが又其中ゝ願ひ度う存じます五「ナニお前の處へ泊らうといふのぢやアでアせん、私ゝ急用があるから夜通し往なけりやア成ねへんだが一寸マア淫免なすつて下せへオイ姉さん此方へ淫遣入り姉さん遠慮にやア及ばねへ此方へお遣入り遣「何でございますオヤお前ゝお雪か何だつて跣足で何いふ者だへ奥の座敷へ往たさり何したかと思つて居た先刻から奥で手を鳴らしてお出でなさる龍卷の親方の子分衆が三四人來てお在で今夜の中ゝも那方へ連て往なけりやアならないと云つてお在なさるマア何所へ往たのだおかねだのおまつぢやア役に立たねへお前でなくッちやア往ねへやナ

第廿二席

五「少々淫免なせへまし私が横合から口を出すんぢやアでせへやせんが私ゝ勝浦から銚子邊へ歸る者で夜道を掛て急に歸らなけりやアならねへ所

が「是々斯様〳〵」の事で掻摘んでお話をアせば何うあつても此娘い其のお方に迫られて仕方がないに因て死んで仕舞ふと云ふので一足違ひで可惜玉に疵位ねなら宜いが碎いて終はなけりやアならねへ私が通り掛つたのい此の娘の幸ひ私の幸ひ第一お前さんの幸ひだどうか其の親方に無理な事を云はねへやうにお前からお願ひなすつたら何ういふ者で折しもあれ何だ〳〵〳〵何を云つてやアがると云ひながら奥から二三人出て來る横子だから五郎い立て居たが腰打掛けて片足を擡げ火鉢を引寄せて煙草をくゆらせながら尻目に掛て向ふを見ると荒くれたる奴が三四人○何だ何が何うしたんだ此の女い俺ッ等の親分の持者だ何を横合から出やアがつて兎や角吐しやアがる又た此の女も然うぢやア無へか首を縊るの身を投るのと忌な事を云やアがつて此の野郎親切でかしに勾引でもしやゾがる奴だらう、ヤア搏はねへ畳んで仕舞へ五郎片頬に笑を含みながら五マアお静かになせいやし畳むとい誰を畳むんだ○己を畳むのよ五氣の毒な話だ

がお前方の褌やドテラを畳むやうな譯よやア往やせん一丁の網でも地引網となれば一人ぢやア畳めますめへ大層な事を云ひなさんな事柄も聞かねへで撲の畳むのと何の事だ通り掛つて氣の毒だから此の娘を救けたんだ△何がどうしたんだ何を吐しやアがる此の郎野此の土地へ來やアがつて巫山戯やがつて龍卷の親分と云へば泣く子も默る五イヤサお静かになせへ泣く子が默らうが何が默らうが龍卷の事を悪いたア云ひやせん△エー面倒だ親分を呼で來い、と云ふが否や主人の源之丞い立上つて源マアお待ち下さい、此の方が親切に連れて來て下すつた者を△何を吐しやアがる己までが此男の肩を掛つかと云ひながら向ふへ源之丞を突飛して一人の男が跳足で表へ飛出したから源旅のお方何所のお方か存じませんが直に此所を歸つて下さるやうよ五インヤ歸りません源夫でもお前さんが此所に居とい大變で今アノお方が親方を呼びにお出でになりましたから五イヤ此所に居る處の三文奴にやア解らねへ、親方とか馬方とか肩書のある奴

に話をしやせう△ナニ三文奴とい何だ九十九里の濱に於て人にも知られた俺ッ等だ板子一枚下い地獄で一ッ悪い風を食へば日本支那い愚かな事亞米利加ダッタン露西亞まで洗れ〳〵て行かなけりやアならねへ身体怖いと思つた事ア是まで無へ所の俺ッ等だ二三日續いた日和疵で魚が寄らねへから捗ろなく大漁のあるやうにと祝ひ酒を一盃飲んで居る所だ偶にい漁に出たり博奕打を半分稼業にして居る處の龍卷の半五郎の身内で金箱附の者バかりだ五ウム然うかねへ皆な金箱の附た方々が列んだから何の事い無へ阿彌陀樣見たやうな方で△巫山戯た事を吐しやアがるなサア打ちまへといふ傍らから柏屋源之丞マアお待ち下さい各々方といふ途端ヨドテラの胴中へ小倉の帶をみて高端折で跣足のまゝ戸口の聊か際のあつた處へ足を突込んでガラッと明け足から先へ飛込んで來た者がある から五郎振返つて見ると身の丈拔群の髭モヂャ〳〵として年齢四十格好の男分別盛りでありながら言はずと知れた無分別者牛ヤイ子分供俺が汝へ

達ヨ吩咐て今お ゆきが來るか〳〵と待てる處へ何だか知らねへが横合から出て嘸言を吐しやアがつて邪魔立てをしやアがる奴ッてへのい此の野郎か子左樣でがす生捻り殺して仕舞へヤイ野郎汝い何所の奴だ五へエ牛ヤイザ汝い何所の奴だ笹棒……途方もねへ奴だ五へエ私い銚子邊の者で ぜせへやすが此の海岸を通りました處が「是々」の事だから此方の主人に掛合て居る中に無法にもお前さんの家の者かい知らねへが四五人出て來て私ヨ對して惡口雜言私いお前さんの事を批評も何もしやアしません初めてお前さんにお目通りをしやしたがお前さんも親方でぜせへやすなら初めての出遇ひの言葉遣ひを以案内で被爲入いませう

第廿三席

牛「巫山戯るな汝等と交際をする男たア男が違はア、コイ聞く能け今下總の銚子で五郎と云つちやア彼の土地で鳴らして居て世間も廣く交際をして向ふい常陸の水戸の邊りから江戸廻りの者も隨分名前を知つてるがアノ

銚子の五郎といふ奴ゝ俺の所で飯焚をして居やがつて冷飯を食ちやアヤレ五郎掃除をしろ、ヤレ五郎何所を掃けと俺が悪く三文奴に使つて居た奴だ其の野郎が此節ゝ芽をふいて大きな面をして居るさうだが今聞きやア其方も銚子邊の者だといふから五郎の事を知つてるだらう五其の五郎とヤすのゝ私でごせへます半ナニ夫ぢやア何だらう五郎ゝ五郎でも人間が違うんだらう同じ名の奴が幾らもあるから五イヤ今お賞めゝ預かつた處の五郎と云ふ者ゝ私で併し親方私ゝお前さんの處へ參つて冷飯を沒馳走になつた覺えはごせへやせん此所でお目通りをするのが初めてでごせへやす半事に依たら俺が食はしてやると云ふんだ五思召しゝ有難う存じやすがまだ夫はどまでに俺も毫碌ゝしやせん云ふも如何だがお前ゝ道樂者か惡黨か知らねへが男に似合はねへ吝嗇な思召し半何が吝嗇れだ五左樣でござへやす男ゝ錢などにこだはる者ぢやアねへ忌だといふ茶屋旅籠屋の女を引張り廻して自分の喰物にしやうなどといふ遊び人や道樂者ゝ然

んな忌味の者ゝ一人も無へ無理をいふ奴があつたら夫ゝ理解を加へ難儀な者ゝ助けてやるといふのが此の社會の持前だ半喧しいや訝う此の女の世話を燒いて好い子にならうといふ考へだらう五好い子にも惡い子にも私チは今云ふ通り此海岸を通り掛つて危ふいから此の女を助けたのが何うした半へン能く助けた〳〵と思ゝ掛やがるが助けたつて篦棒めへ酒の一合も飲まして錢の二百も呉れてやり、やア宜らう五私チゝお前方から錢を貰はふッて此所へ來んぢやアねへ當人が忌だといやア持物にしたッて治まらねへ譯の者だ貧乏人の嚊アが寒の中に單物を着て慴へて居ながら其の亭主を打捨る事が出來ず共ゝ裸身で寒いのを忍んで暮して居るのは互に好いたとゝ好ねへとゝいふ所の中他うち思ふやうな譯の者ぢやアでせへません忌だといふものを何すれア此前はんゝ宜いんだ半何うすれア宜ッたッて篦棒めへ俺の手から金が出て居る五どの位エ金が出て居るか失禮ながら扱ふからにやア承まはらなければアならねへ半されバ鹿野山

の市へ連れて往た處が鹿野山のお山へ登つた事がないといふから通し駕籠で連れて往て散々旨へ物を食はし天神山が見てへの百首が見てへ小湊の誕生寺へ參詣したり清澄までも連れて往て散々樂しみをさして着物でも何でも皆な乃公が拵れエてやつたんだ雪アレマア那んな嘘ばかり云つて牛何だ此の女途法も無へ奴だ今更嘘だといやアがると只ア置かねへぞ五郎此時に首を傾げて五夫ぢやアお前さんが御散財をなすつた處の金を此所へ列べたら夫で勘辨をしなさるだらうね牛乃公が違つた金を出せるなら出して見ろ金から先へ持て來い五どの位エなんです牛五十兩と六十兩の金を此の女に入揚げて居らア只た今其金があるか五夫ア五十が百の金でも人の命の助かる事だ私チが着て居る物を脱いでも償のひませうが趣意の立たねへ事ゝ四文でも出しやせん牛間抜な事を云ひなさんな人の中へ這入て口を聞くならバ金から先へ出して口を聞け十兩と纏まつた金ゝ懐中にあるめへ五夫ア道中金を持て歩行く事もあれバ持たねへ事もあるが私用で急ぎ國を飛出して勝浦まで往た歸りだ一ッ走り國へ往バ百でも二百でも金を呼で見せる牛箒棒め金も無へ癖に嘘言を吐くな、歸れ〳〵源之亟明日の積りだが急に今夜よなつた雪アレどうぞ助けて下さるやうにと女ゝ五郎に縋り附ました折しも廊下に立聞をして居た人がヅカ〳〵と夫に出て來て男馬鹿牛〳〵。と二聲ばかり掛まするとと牛ナニ、と云つて振向く牛五郎をキッと睨まへ男何と云ゝ何だお前ゝ乃公の家に居て散々惡い事をして及公に迷惑を掛た事を忘れたか汝の事を牛五郎と云ふ者ゝ無へ馬鹿牛〳〵と呼ぶ大馬鹿野郎乃公の家で醤油バをして居た事を忘れたかと云はれて牛五郎熟々見れバ銚子に名代の〈毋田中玄蕃の番頭市兵衛とす年齢ゝ最早六十餘の人なれども中々商人に似氣ない處の肌合の人にて房總の地を掛廻りて居ります若い者を一人荷持に連れて居り今しも頻りに酒を飲んで居りましたが之を聞兼ねて其の處へ出て參りましたので

市扨誰郎かと思つたら木村屋の親方かへ私ハ堅氣だからお前さんと口を聞た事ハないが私ハお前の顔も知ッてれバ能くお前さんの樣子を見て知つて居ます、五郎ハ忽ち改たまつて五是ハ失禮を仕まつりました命の旦那でございますか市イヤ私ハ召使ひだモシ金が入用なれバ私が此所ゑ貯へて居るから其奴ゑ金をおやんなさい人を助ける事なれバ私も共にお前さんに助力をします五イヤ思召しハ有難うございますが意趣柄の知れねへ金ハ一文だッて遣る譯ハではせん市コレ柏屋の御亭主算盤を持てお出で半五郎が立替た處の金があるなれバ何處で幾ら何處で幾らと目ッ張りッ子で勘定するから算盤をお出しと此の勢ひに半五郎何とも云ずシヨ〳〵として初めの氣色何處へやら遂々此處を立退いて仕舞ひました跡に五郎ハ莞爾と打笑み五飛だ所でお目通りを致しました市今夜ハ私の座敷へお泊んなさい五ヂヤア御免蒙むって市アー然うしないと此の娘も安心でないから畏ゝ私をお助け下さい五夫ハ私が金が無くとも此の旦那から

お借りヤしてもお前の分を償のつてやるから心配しなさんな柏屋さん飛だ御迷惑だッた大暦威張たお方にハ何しやした子源皆な何時の間にか歸つて終ひました五アハヽヽ大暦な勢ひで雷さまが鳴込んで來たが歸る時にハシヨ〳〵として往なすつた雷ハ上から來ると思つたら横から來たから横雷だらうと其夜ハ柏屋へ一泊いたし翌日五郎ハ右のお雪を連れ田中玄番の番頭市兵衛に別れを告げて銚子へ立歸りまして子分の確かな者を二三人附させ江戸の淺草田原町日傭取り久右衛門方へ届けて遣はしました茲に那古の初五郎ハ國表へ歸つて此度五郎と面會をいたし洗つて見れバ同じ木村の家より出た骨肉同胞と聞き一統の者も奇異の思ひを致して居る中に初五郎ハ旅の支度を整へて只た一人の子分を連れて銚子へ參りまして五郎に對面をいたし初兄貴能くお前今日ハ家に居て呉れた五是ハ能く來て呉れた俺の方からお前の方へ行うと思つて居た處お前の方から來られて氣の毒千萬女房ハ手を仕いて玄能くお出でになりました宿が

歸りましてお前さんのお話を精しく承はりました實に私しも嬉しく思つて居りましたがどうか末長くお慈え下さるやうに就ては和郎の姐さんよもどうか其中にお目通りをしたく思ひます到是ゝどうも有難うがす私チも今度ア百万の味方を得たやうに思ひやす玉マア何所かへ往て一杯喰べやうでゝないかと觀音前の芳野屋へ參り飲んで居ります中に玉オイ女中や玄ハイ玉お前の所に鰯の押漬があるだらう是ゝ此の土地の名物だからマア是で一杯飲ねへ到イヤ有難う御座へます時に兄貴にお願ひヤやすが今度私チの土地の舘山てへ所から出た相撲年寄の屁ば子で今年六十九になる尾上唯右衛門といふのがモー年も澤山取てるものだから中々遣り切れないに宜い年寄でもねへ者だから田舍廻りをして僅かばかりの錢を持て歸つて來るんだが實よ氣の毒な事なんで處が一人りの弟子があつて三段目の花籠力藏と云つて是がマアおせ〳〵三段目で可なりお客樣方の御贔負にもなり魚河岸や川通りの贔負になつて居るが就ちやア尾上といふ人が一世一代の花貧相撲をして夫を資本にして國へ引込んで日向ぼつこをしながら孫の守でもして此世の暇を取らうといふ面白くもない酸いだ話だけれども同じ所に居て聞て見れば夫も忌とゝ云へず私チの家へ重荷を下されましたがどうも今度保田で相撲をしやうと思が氣の毒だが手拭を五十本計り受て下る譯よやア往やせんか

第廿五席

銚子の五郎は那古の初五郎の頼みを快よく承諾し手拭を尚五十本足して百本を夫々へ配る事を受合ましたから初五郎ゝ國へ立歸つて仕舞ひ取敢ず事を運んで保田へ參り松屋といふ家へ泊り込みました又た共に參つた人達は大黒屋へ泊り安房國平郡保田本郷本名村人皇四十五代聖武天皇の御祈願所乾坤山日本寺俗に之を保田の羅漢寺とす」て五百羅漢が岩より一人毎に彫り附てあります頂上へ登つて見れば向ふ地の相撲駿河富士の山も眼の下に見えまして其景色と云ふものは云はん方なく左の方に伊

豆を眺め魚獲る船は頻りに眼の下に見える是を鋸山と云いまして安房と上總の國界で御座います音よ聞く鋸山へ來て見れば安房と上總を引裂きにけり嵐雪の碑が立て在ります引卸す鋸山の霞哉然る處一日置て翌日丁度折もよく銚子から致して前には花飾りをして子分大勢を引連れて濕井戸の原を横切り鹿野山の麓を通り天神山へ出で荻生金谷を過て保田へ參りました然るに同所の旅籠屋松屋といふのへ前日より已に來つて宿を取て居りした初五郎、五郎の來りしと聞て狼狽しく出迎へまして剋是は兄貴能く來て呉れた今絆綱を取るうら待ねへ五イヤ然んな心配を掛るよやア及ばねへと馬から降り松屋の離れ座敷へ上り挨拶終つて跡は酒宴となり剋此の鹽梅なら明日は天氣も快さうで有難へ五然うさ併し明日といふ事には往めへ剋イヤお前さんの來るのを待て居たのだから明日直にやッつける積りだナイ〳〵關取是へ出なさるやうにと云はれて夫へ出て參りましたのは尾上唯右衛門といふ者木綿の行丈の揃はないのを二枚引掛け其

の上に處々色の變て居る紫呉呂の朱鷺色甲斐絹裏の附たるのを着けまして博多は通り越して薩摩潟まで往たといふやうな帶をゞめ夫へ兩手を付き水鼻をすゝりながら唯初めましてお目通りを致しました私しは尾上唯右衛門でございますと云いながらも袂から手拭を出して鼻を拭て居ります五郎といふ人ゝ決して人に無禮をした事がないから兩手を付て是は高うございますが關取御免なせい初めまして御目通りを致しやす私チは銚子の五郎といふ者で那古から毎々話を承まはりやしたお目出度うございます丁度私チも宜い鹽梅に此方へ參つて嬉しうございますがお役にゝ立ませんけれども御催中ゝ此方へ逗留して居りますから御遠慮なく何事でも被仰て下さるやうにお願みます唯モー勿体至極もない御言葉那古の親方さんの庇蔭で漸々私しもゝ先づ此度で江戸を辭つて仕舞い是からゝ國へ引込んで日向ぼつこをして生涯安樂に送られますコレ力藏よ此時入れ替つて其處へ出たるは二十三四に相成ります頭は矢倉落しに結いな

し、縮緬の小袖を二枚着て下へゝ大巾の縮緬の袖の就たる胴へは桃色木綿を就けたる襦袢に緋博多の帶を神田結びにして黒縮緬の紋の附たる羽織を引掛て色飽まで白く愛嬌溢るゝばかり同じく兩手を付き初めまして御目通りを仕ります唯是ゝ私しの弟子の花籠とゆしまするどうか又た御贔負を頂いたうございます五是ゝ〳〵闕取此方へお出でなさい尾上さん宜いお弟子でございますねへ唯イエモー是より外には便る者もございませんで五ナアニ役に立ねへ奴が幾らもあるよりゝ役に立つ者が一人の方が宜い長者の萬燈よりゝ貧の一燈却つて一つで事の足りる者でございます

第廿六席

傍に居た初五郎も言葉を添へて初感心な事で此の花籠といふ者ゝ師匠を大事にするどうか兄貴其の思召で可愛がつて呉るやうに五夫ゝ何よりな事人ゝ夫が第一で夫が無へ日にゝ世の中ゝ間だ私ゝ銚子の片ッ隅に居るが相撲が嗜で江戸の本場所へゝ態々往て十日の中にゝ一度ッゝゝ叱度見

ねへ事ゝ無へ夫ゆへ旅を廻つて來る相撲ゝ能く尋ねて呉れやすお前さんはゝ初めてお目に掛るが些とマア銚子の方へも廻つて來せエやし及ばずながら御相談をしやせう是ゝ甚だ輕少で沒座へやすが那古の面目次第も無へと云つて金を百五十兩取出し其の外にまた五是ゝ餘り少ねへけれども此方の闕取にどうか上て下さるやうにと五十兩差出しましたから唯右衛門ゝ只だ涙にむせんで唯エー有難い仕合せ滅想な此ンなに莫大のお金を頂いて濟む者でゝ沒座いません五ナアニ手拭數よ合しちやア少ねへけれども色々物入が續いて出た跡だものだから此地ゝどうか知りませんが銚子邊りゝ景氣が惡ふ沒座へます十年にも二十年よも見ねへと云ふ不景氣で夫が爲めに行屆きませんが、何うか我慢して下せへ又た其の中に此のお闕取りに廻しの一本位ゝ心得て居ますから頭勝の事をして跡の消へちまうのゝ往ねへから來長く鑄掛屋さんの天秤ぢやア無へが細く長くお交際を致しやせう苦有難い仕合せ師匠の喜び如何ばかりで沒座いませう

又た私しのやうな者へ斯樣なお迷みを頂きまして實に生れて此ンな多分なお金を揃へて拜見をしたのゝ初めでございます五ナニ關取申戯云ひなさるな關子の宜い事ばかり云てる是からお前さんなどゝ金の中へ轉がり出るやうな身になるんだから身体を大事にして安女郎や何か買て遊なんぞ搔ないやうにしなければ往ねへと跡ゝ酒宴となつて四方山の雜談浮世の話に笑つたり或ゝ感じたりして居る中夜が明るが否や兼て願ふ處にも願ひ万端手配ゝ届いて居るからドンガ〳〵ドンガドカ〳〵と太皷を鳴らして居る中に打揃つたる處の銚子の子分共を引連れ棧敷へ來つて見るとまだ一向來客もないやうな有樣五那古の是で客が來やうかの初是でも諸方から寄て參りやすと彼是云つて居る内に向ふの柵から出て來り此方の柵からも出で來りゾロ〳〵引續ひて乘込み來る流石房總の間だけに見る〳〵内に土間も棧敷も一杯の大入太皷矢倉が海の方へ近附て居るゝ音が海へ響いて聞へるやうにと土地の者の奇轉と見えます江戸方ゝ大關が

花籠關脇ゝ槇尾山友の海寶來山小松野上總方ゝ大關が棧し關脇ゝ鹿野山馬刀貝山の音玉勇天神山狩生川景滑底一里なんどゝ云者よて晴天五日の相撲を四日まで花籠ゝ勝通しました第四日目になつて行司木村仲右衛門東西〳〵〳〵高うゝでございますが御免を蒙むりまして此の所に於て明日の取組を申上ますと初番より取組を段々に讀上て傍らに裁著を履て蹲踞んで居る處の呼出し奴に裏と表兩面を見せて一々相渡し一番仕舞に「東西花籠にゝ棧し棧し明日ゝお早うございます……と見物行事御苦勞といふが否や、ドッと動響き渡つて小屋も壞るゝばかり此翌日の勝負に就て一ッの事件出來に及ぶのお話し續いて申し上ます

第廿七席

偖翌日は天氣も極穩やかにて今日限りの相撲といひ且は大闘同志の取組と聞き見物は早朝より詰掛け各々肩を張らし拳を握つて棧敷土間共に一杯に詰込んで居り升此の棧し三五郎といふ者は田舍相撲よして腕達を好

み謂はゞ相撲附たりの破落戸にて上總方の者大勢皆な、西の棧敷へ上つて見て居ります正面より東へ掛ては房州の人達が各々詰合て見て居ります中に其日の相撲も數番御座いまして殊に初切といふものは至つて面白いもので其の初切等も段々濟んで仕舞つて扨て行司が　伸東、棧し〳〵、西花籠〳〵。と呼上る、見物一同ヤー花籠〳〵。と云ふと又た夫が氣に入らない上總方の人達は紙屑籠ー といふ者があると又た片ッ方でも、棧しもねへ者だ棧橋太汐が來ると流れて終ふぞー、エーワッといふ中に双方土俵へ昇つて塵を拂ひ立て水を呑み再たび土俵へ昇つて足にて砂をならし、双方とも仕切つたる中へ行司の木村仲右衛門鯨の飛出した處の纏上下に腰板の板の出たる袴をつけ團扇の紐も赤いのが土器色になつてるのを持て夫へ出て　伸此方棧し、片や花籠互ひに睨み合て、まだ〳〵まだ〳〵、エイと團扇を上るや否や棧しの方からドヽヽヽと突張て來たから花籠もズッと跡に退つたが乃ち假令三段目の闕取にいたせ、土俵に於て悉く修行をした處の闕取なれ

ども土俵際にてウンと耐へてハッとかつぱじいた事なるに依り已れと棧しもポンと飛出しダメを突た者だから尚更向ふへ走つて行て行司溜りへスポーリ俯伏に倒れました行司木村仲右衛門團扇を上げて　伸花籠……。といお途端に櫓ぜのドンが〳〵ドヽヽヽガドガ〳〵と太鼓の音此時上總方の者は皆な一同總立ち立つて「ヤア、モー一番取直せ、此の勝負も何處までも棧じが勝たんだ花籠の踏切があつたんだ全たく棧しの勝に違へねへ房州方も又た負花籠ゝ踏切りもねへぞ、花籠の勝たに違へねへ態ア見やアがれ今になつて此樣な事ゝ文句を附る奴があるものか何處までも花籠の勝たに違へねへ上ヤア行司下りちまへ。木村仲右衛門も　伸只今御最負樣方よりして踏切があるとの仰せで浮座いましたが花籠に於て踏切も浮座いません正しく是も花籠の勝に相違ございませんから此の團扇を上ましたに依り左樣思召し下さるやうに上襲を食へ何を叫しやアがるんだ搏もねへから行司を引摩んで終へ籠棒めへ棧しが勝たに違へねへ蹈切があつて勝とい

ふ事ハねへ段ナニ踏切ハねへぞ上巳ハ何處に目を附てる屁鋒行司、叩き撲つて仕舞へと騒立ます

第廿八席

尾上唯右衛門ハ曲ッた腰を延しながら唯コレ力よ汝が負に違へねへから負たとして呉れよ、金さへ取れが夫で宜んだ、此樣な現金なものもない、我弟子が負ても金さへ取れが夫で宜、と全く儲け一方で勝負にハ構はない、是を聞て銚子の五郎五イヤ〳〵尾上さんお待なせへ勝た者ハ勝たとして置て貰はふぢやアねへか勝た相撲を負たと云はれ〳〵が心持の悪いもの、伸然ら行司仲右衛門ヲ上るが依估も最負もない私しハ此の土俵へ昇れが家業の事ゆへ決して違つた圓扇の上方ハ致しません上、まだ那な事を云てやアがる向ふ方だから向ふの最負をしやアがるんだ、箆棒めへ一人相撲ハ取れねへや此方からも大勢來て夫で相撲が取れるんだ、此の勝ハ何處までも棧しに違へねへ預りでも承知しねへ、引分にもならねへぞ、此時五郎棧敷より降まして五上總の方々和殿方へ對してヲ上るも、嗚呼がましいが私しも若年の折からして相撲を好んで大概素人目にも、勝負ハ解ります、況てや夫を以て業として居る行司の勝とじた者ハ勝にして置て貰いたい何分にも立騒がないやうにして下さい何れ明日ハ御土地へ顔を出してお詫を致すから生エ〳〵聞ねへ、何を吐しやアがる、汝が其處へ出て扱かふ役ぢやア無へ、年寄が出て負たといふに何を云つてやがる、棧しハ其時ハ、土俵から下て（幾御最負の各々方又た勝ハ事もございます、決して各々方のお顔の汚れるやうな事ハ致しませんから今日ハ私しが負となりやせう、と棧し三五郎自ら土俵を下ましたから遂に事此ハ解まり金谷へ立歸りましたから跡ハ小屋を取崩し各々松屋方へ引取り一同大酒盛ヨ相成りました五唯右衛門さんの前だけれど那アいふ事を云ひ出してハ宜くねて、總て相撲取なぞハ土俵の上へあがれが金づくぢやアない、金で勝負ハ出來ない殊に賣出しの大事な身体、負たと云やア何方へ對しても面目ない事、少し位文句を附ても勝てる

ものを負たと云ふのゝ間違つた話しだ　唯イヤ私しもさうゝ存じましたけれど若し間違ひにでもなると往ませんから五夫ゝお前さんの老婆心で成はど物事を穏かにするなア宜が當人の身に取てゝ心持が悪い併し宜い塩梅に無事で済んで宜つた向ふ方でも何も別段に怒る所もあるめいが明日一寸五六人で顔を出して一通り向ふの顔を立て置た方が宜らうといつて先づ其の夜ゝ江戸から洗れて來た藝者や旅を始終歩行てる藝人を呼んでドン〳〵騒いでると唯右衛門ゝ頻りと御酒を頂いて居た處が餘り深くゝ飲めないゆへ甚く酩酊いたして苦しい者だから庭の向ふの離れ座敷へ往て人の居ない處へゴロリ轉がつて其儘寝込んで終いました此方ゝドンドン騒いでる處へ暫らく經つと「親方大變の事が出來ました今アレ那の音でございます上總方から大勢若い衆方が來て酒に醉倒れて居る處の尾上の親方を引攫つて參ります

第廿九席

花「扨ゝと云い乍ら花籠が傍らにあつた所の脇差を取て尻をひんまくりながら駈出さうといふのを五郎ゝ五「マア〳〵待なせへお前の師匠が攫はれて往たか行ねへかまだ見届けねへ中に騒ぎ立てゝ宜くねへ今調べてやるからと云つて離れ座敷へ往て見ると唯右衛門ゝ果して居ません外に居る所もない樣子外から來た者よ聞くと今向ふへ擔がれて往た者があるといふに扨こそ夫に違いないと五郎ゝ五是ゝどうか私に任せて呉れ初五郎も之を聞て刎兄貴私チが往やせう五イヤ然うでねへ私が横谷から口を出しゝに依て夫ゆへ此ういふ事になつたのだから私チが引受て事をするから私チに任して呉れ誰も來ちやア往ねへよ決して私チが悪いやうにゝしやせんからと云いながら脇差を一本持込んで素足へ草履を履て只一人金谷を差して出掛て往ました保田から金谷ゝ些かの處でございまして漁師の多い處でございますから海岸へ往て見た處が何れも漁師の家ばかり覗いて見ると別よ唯右衛門の居る樣子もない其中に左りの方の柴山を段々に

昇つて見るとカンカンと燈火が外にさすから何であるかと來て見ると地藏堂へ大勢集まつて居り向ふの隅の柱へ尾上唯右衛門を高手小手にふん縛りつゝ大勢寄て集つて酒を飲で嘸言を吐でる處を見ると五郎ムッとして突然り中へ飛込み五モシ御免なせへ私チハ今日相撲場で口出しをした處の者で入らざる口を利く奴だと思召しがありませうが夫が根になつて年寄の尾上へ唯右衛門を連て來て縛り附て置くといふなア何ういふ譯ゝ意恨があるなら私チに然ういつて下せへ此の人は已に我が弟子に向つて勝た者を負にしろと云つた位ゐの者何で繩ゝ掛なすつた人を繩に掛るといふハ輕からん事何の盗みをしました此の人を繩に掛ずとも意恨があるなら對手ハ斯くいふ私だから繩ゝ掛るとも切るとも突くともして下せへ但しハ尋常に私チの顔を立て是なる老人を渡して呉れるか夫とも私チの命を取るか其の二ッ一ッの返答を聞きてエと云いながら腰を捻つて一刀の柄に手を掛て身構へに及ぶと上總方の者誰一人此の權幕に懲ろいて言葉を出す者もなく處へ表から致して駈込んで來たのハ上總の潤津村の新藏同じく上總の羽生の奴ヤ是ハ何郎と思つたら銚子の親方五イヤお前さん方が此所へ來たのハ幸いお扱ひ下さるなら是々斯々いふ譯だから宜しくお頼みヤしたい新夫ハ飛でもない此の土地の衆が失禮ながら惡いどうぞ私等に任して下さいと羽生の奴ゝ潤津の新藏が取扱ひにて金谷の人々皆一同詫て事濟みなりました

第三十席

扨五郎ハ金谷の人達と手打をいたし此の上からハ此方への御馳走に金谷村に於て三日の間相撲を催し度うでざるといふゆへ一統の者ハ悉く喜んで何分願ひたいといふに依り然らば房州方の相撲ハ花籠を初め殘らず引張つて來るゆへ是にて双方和熟するやうに乃で愈よ事が極つて夫々役場〳〵へも届け其の上にて小屋を掛まして晴天三日の相撲を催はす事みなり又た催はし主ハ金谷村一統の若い衆にて諸方より酒樽を贈り或ハ金

を贈るもあり、ピラなども掛け小屋内へ殊の外繁昌いたして居りますと初日を滞りなく打て仕舞つて二日目の中入頃になると乗込んで來たのゝ深澤清兵衛大戸川村の五藏就れも此の邊に於て有名の御用聞でございますが迚「コレ此の内よ相撲の掛りの者があらうから是へ出ろ茂へエ 清イヤサ金主に此所へ出ろといふのだ此ン中で頭立てる者が一疋や二疋あるだらうから此れへ出ろ茲に於て二三人重立た者が夫へ出まして掛何でございます 清躊躇め立て居やアがつて何と心得る此の相撲といふ者ゝ花會に均しい處の催はしだに依て俺の見て居る前で小屋を壞して仕舞へ 掛へエ併し夫々御届けを致しました 清イヤ届けても何でも役場ゝ役場だけの事だ關八州を御巡廻をなすつて理非を御糺しなさる處の八州樣の仰せだ、八州樣御役人の言葉を背くといふか 掛へエ恐れ入ます 清天神山よ百瀬彰太郎廣瀬三郎兵衛樣も沒在がある穩やかならん事だから態々是まで罷り越たんだ 掛エー是ゝソノ房州の人と土地の者と喧嘩を致して其の仲直りの相撲でございまして銚子の親分が種々御取計らい下さいまして 清ナニ銚子の親分とゝ何だ 掛へエ銚子の親方で 清親方か馬方か知らねへが何だ……ウムン何だ此の前も佐原の岩崎で軍鷄鴛籠に向つて世迷言を云やアがつた奴だ途法も無へ野郎だ動ともすると諸方へ面を出しやアがつて又た此の處へ來て然んな餘計な事をしやアがる此間他所から聞込んだ事もあるし 掛エー恐れ入りましたが此の相撲ゝ此の四五日前に保田でもあつたんで 清イヤ保田ゝ保田國も變つて居て此方ゝ上總向ふゝ房州その保田の相撲も銚子の五郎が取扱かつたか 掛左樣でございます銚子の親分が……清親分とゝ何だ我々に對して親分とゝ何の事だ五郎なら五郎と云へ 掛恐れ入りました五郎樣が 清樣を附るにやア及ばねへ 掛五郎殿が 清殿も入らねへ 掛五郎さんが 清エーさんを云ふにやア及ばねへ那奴ばかりか 掛へエまだ那古の初五郎さんが 清またさんを附やがる初五郎と五郎と兩人で催はしたか不埒な奴だ見て居る前で小屋を壞して仕舞へ 掛何うか御免を蒙り、

たい者で遇成らねへ、と直ぐ其場にて小屋を取崩させ清兵衛五藏ハ此所を引取りました、

第三十一席

五郎ハ之を聞て大いに氣の毒に思ひ、此入費ハ私しから差出し御土地に御迷惑ハ掛ません、と云つて五郎早速國から金を呼んで夫々へ殘らず手當をいたし房州方ハ兎も角上總方へハ隅々までも行渡るやうに手當をいたしまして五「那古の、俺ハお前に別れて歸るから型兄貴嘸心持が惡からう、お前にばかり出さしちやア濟ねへ。五「ナアニ夫ハお前と俺の間だから拂やアしねへが何だか俺ハ面白くねへ五「然うだらう嘸心持が惡からう五「ナニ飛だ古疵が起つたのだ其癖古疵ほどの事でもねへがどうも仕方の無へものだと種々初五郎が慰めるのを聞かねいで五郎ハ子分や何かも國へ歸して仕舞ひ、已れハ保田から致して仕立船を拵らへて相州浦賀の燈明臺の傍へ着けました前よハ港口に御番所がございましたに依りまして其の御番所脇

の處へ船を着けまして夫から一ツ山を越して濱町といふ處へ出て東浦賀の德田屋へ一泊をいたし夫より此の家を立て金澤八景を見物いたし江の島鎌倉へも參詣して程なく江戸表へ出て先達て世話になつた廉もあるから絹看板の甚五郎の處をも尋ね夫から淺草觀音へ參詣を致し江戸を立て成田の不動滑川の觀音を參詣し觀音前の中屋といふ家へ泊りました五「オイ姉さん何か旨い物があるなら澤山も飲ねへが酒と肴をさう云ッて呉んねへ女「入らッしやいまし何でございますお肴ハ鰹に鮪、鯉、鯨のやうなものでございます五「ムウさうか何かお前の方で見繕ッて旨へ物を呉んねへ女「畏りました……オヤ貴郎ハ銚子の親方さんぢやアございませんか五「ムムお前は誰だッけのう女「モー貴郎お忘れでございませうが妾ハアノ津の宮の村田屋よ居りましたまさでございます五「ウムアノ何かへ江戸の山谷の人だと云つたンぢやアねへか女「左樣でございます五「津の宮で情夫でも出來て此方へ來たんだな、是も男の爲なら仕方が無へぢやねへか女「御常談

ばかり其樣な次第ぢやアございません妾しいモウ飛だものに引掛りまして困り切て居ります　エ何に引掛つた利根川へでも飛込んで水杭へでも引掛つたのか　エ然んな御串戲處でいでございません本當よ詰らない者に引掛て今更後悔をいたして居ります　エムウ夫ぢやア何樣なものに引掛ッた　エ實は那の大戸川の五藏さんといふ御用聞がありますが其所の子分の盧無藏といふ人よ引掛りました　エ宜いぢやア無へか上の役人だ

第三十二席

夫が五藏さんの處で冷飯を食て厄介になつて居たのを知らないで引掛りました處が恐ろしい不人情な人で肌身を許した人をさう云ッちやア濟ませんけれど本當に詰らない人で遂々お金が足りない處から津の宮の方を辭つて仕舞つて澤山此家でお金を借込んでモー妾ハ麹町の井戸へ陷落たやうに急に上る事が出來ません　エ麹町の井戸と云ふなア深へか　エ江戸の麹町と云ふ處ハ山の手ゆへ至ッて井戸が深うございます　エさうか併し夫

ハ因ッたものだ　エ明ても暮ても博奕にばかり耽り込んで居る丸で博奕を家業のやうにして居ります　エ今夜邊りも大方五藏さんの家でドン〳〵初まつてませう　エムウ夫ハ何ういふ譯だ　エナニ貴郎御用聞樣の家で誰も手を出さないものですから皆な平氣の皮で遣て居ります　エ立派な商人や旦那方が大勢寄ておやりなさるのでございます　エ五藏さんハ家に居て寺口を取り宿とかいふのでございますから何を食るのでも食させるのでも皆な家の儲けになるのでございます　エ私の本夫ハ其處へ往ちやアマゴ〳〵して居りますのでどうも困り切ます　エ又た今日も金を五兩貸せといつて眞正よ仕樣がございませんよ　エウム夫ハ困つた者だと聞ながらも五郎ハ首を傾げ頻りよ考へて居りましたが頓ての事俄かに急用を思ひ付たる如くにして此家へ泊らずして初夜過る頃此所を立出で滑川を立て大戸川までやつて來ると田舍の事ゆへ日が暮れると往來もない位ね　エ寂寥として居る處を通り過ぎて行く中に何と云ふ處か知れ兼たれど誰に聞べき處もないから殆ん

ど當惑して居ると垣と垣の間から眞黑になつた提灯へ燈火を點づか〳〵と往く者があります五オイお前よ少しお聞きやしたいがアノ大戸川村の此所等かね男ハア左樣でがす五アノ御用聞の五藏さんといふ人の家ハ何所かへ男お手先の旦那殿かへ五さうさ男夫やア彼の向ふの門のある家でがす五然うかへ大きに有難うとグルリ後ろへ廻つて樣子を聞くと誰憚る處もなく丁よ半よと三國史でハ無けれど丁半境の賭い最中五郎突然り雨戸をこぢ開け樣側へ躍り上るや否や足で障子を蹴外しながら中へ乘込んで見ると一座の者皆な顏と顏を見合せて一統驚ろいて居る樣子正面の所に五藏が居ります五コー五藏さんお前よ乃公が少し聞てエ事があつて此所へ來た五藏ナニ何と心得て人の家の縮りを夜中明けやがつて剩さへ障子を蹴破り躍り込んだ汝ハ賊だな五藏を喰て西へ飛べ何を吐しやアがる

第三十三席

御用聞なんぞと大層な事を吐しやアがつて五藏ナニ御用聞に違へねへが夫が何うした五宜い加減にしやアがれ御用聞と肩書のある者が家へ博奕を開ひて多くの者から汝ハ寺口を取て居やがるだらう僅かばかりの事を目くぢり立て嗾ぎ立て忘れもしめへ金谷を相撲をした時に八州樣の役人を肩に掛やがつて花會に均しい相撲だから成らねへと見て居る前で小屋を崩させ然うして已が家で博奕を開いて濟むと思ふか此の野郎已が素首を引こ抜くから覺悟をしろ遁がの五藏も此の勢ひに僻易して只だ首を垂れて居る處へ四五人の者も夫へ平伏して、どうぞ御慈悲を以て御勘辨を願ひます是ハ餘り少なふ御ざいますがと金を二分其處へ出した五コー串戲ぢやア往ねへ乃公ハ內會をはぢくつて金を貰ひに來たんぢやア無へ事拵を聞きに來たんだ是でも宜い者か宜い者で無へか其の次第を聞かして呉れ○イヤハヤ賊に面目次第も御ざいませんどうぞ御勘辨を願い度う存ます五藏も此時兩手を仕て五藏大きに乃公が惡かつた實ハ家を借りられて斷るにも斷はれねへ處から此ういふ事になつたんだ今も乃公が此所へ

來て然んな事をされちやア困ると云つてる最中だ、銚子の腹も立たうが勘辨をして貰いてエ玉然んなら然うと最初から柔らかに出て事柄を云へば乃公もいふ處は素より無へ然ういふ譯なら宜うがす大きゑ失禮を致しやした孰れ此の障子と戸ゝ金で上ちやア失禮だから私チの方で拵らへて持たしてよこす　五爲串戯言ひなさんな然んな心配にゝ決して及ばねへ暴風雨を食らつたと思へば夫までの事だ、乃公が惡いから乃公が暴風雨を食たんだ決してお前の方で惡い處ゝ無へどうぞ心を取り直して勘辯をして呉んなせへ就ちやアどうか此事が世間に聞えて見ると乃公が恥辱ばかりでなく役場にも係はるから是ゝどうぞ默まりで居て貰ひてエ　玉私チも銚子の五郎で御座へます然んな事をッべコべ人に告るやうな男ぢやア御座へませんから其義ゝ御心配にゝ及びません、と莞爾り笑つて、此所を五郎ゝ立出で佐原へ往て泊らうと思ひながらもウ夜が曉ましたから悠々と佐原間近く來やうとすると何方を見ても田甫中丁度四角みなつて居る石の地藏の影からして一人長刀を取て打て來る、五郎身を開かすと又た一人竹槍を持て扣へて居り今一人が又後ろゑ刀を持て立て居り前の一人手頃の棒を持て立現ゝる此時に足を畝だて左右をキッと眺め前後へ心を配つた五郎玉アー解つた大戸川といふ奴ゝ解らねへ奴だアノ位ゐ決して口外をして呉れるな乃公も云ゝぬと契ひを立て來た者をまだ疑つて子分を以て乃公を途中で殺せといつて頼まれて來たお前達氣の毒ながら恨みつらみゝ無へけれども是れとて乃公が手を組で殺される譯にも往ねへから賣て來る喧嘩なら買てやらう一人二人りゝ面倒だ四人一緒に双手になれと、一刀の柄ゑ手を掛るを見るより一同バラ〳〵〳〵雲を霞と逃て仕舞つた玉アー事拵が解つたと見えて逃げて呉れたゝ向ふの仕合せ、乃公の幸ひとんだ馬鹿の奴が世の中にあるものだと獨り言して是より佐原の佐原屋の門を叩き一泊なして翌朝直ちに銚子の濱へ立歸りました

第三十四席

さて銚子の濱方ハ日々の大漁で御坐いますから殊の外喜んで居ります總て、九十九里邊りハ海の事を海田といひ鰯の事を米と云ひます濱方でハ鰯さへ獲れゝバ土地ハ此の上もない繁昌で御座います其の鰯が日々獲れるから五郎も一通りならず喜んで居ります皆な近鄕近在から出掛て來る者もあり江戸表からハ講釋師又ハ義太夫語りなども出て參ります土地の婆さん達が籠を持て濱方へ魚を貰ひに參れバ快く是等に分てやり見る事に付け聞く事よ付け聊かも人の爲を思ひ情に絶間といふ者ハ御座いませんと云ふなア子「實以て大變な譯で五「何だ其樣な事を云ッてやアがつて……時に周章しく子分の者が一人參ッて子「親分大變で御座います五「何だ大變エー何が大變なんだ子「ヘエ何で御座へやす彼の昨夜私ちが話しを聞たにニア大戸川の五藏どんの方へお内の子分衆方が大勢押して强て家も何も微塵に毀して道具諸式から着類までもツタ〳〵にして家中命カラ〳〵で逃て仕舞つたといふ話です五「誰が然んな事をしたんだ子「ナニ佐原又ハ津

の宮大戸川邊りに居る親方の子分衆が親方が極質素に事をなすつて其の塲をお歸りがあつたのを夫ッをまだ疑ぐりやアがつて途中に待伏をしやアがつて親方を殺さうとした奴があつたッてい事で正眞に途法も無へ奴等で五「ウム夫を誰から聞いたんだ俺ハ一言も誰にもをくびにも出さねへ事を誰が夫をいつたんだ子「左樣で御座います親方の御仰るゐハこの人達も俺を殺さうといつて自分の了簡で來たんぢやアあるめへ、五藏どんに賴まれて來たんだらうが併し身に悪る火ハ拂ハなけりやアならねへから氣の毒ながら三人や四人切て仕舞うと親方が仰しやつた其の氣の毒と云つた御一言を聞て向ふも情のある親方と思つたから逃ちまつた事で其の人達が話したのをお家の子分衆が聞いて然れならバと云つて押て往た事で御座います五「夫ハ大變な事だ子「夫御覽じろ全く大變で御座いませう五「口眞似をするなぢやア取敢ず船を拵らへて呉れろ子「親方何所へお出なさる五「是から大戸川まで往なけりやアならねへから子「今日ハ水が少う御座い

ますから船ぢやア却ッて遲う御座いませう五さうか夫ぢやア馬を仕立て
呉れと命令まする と直に達者なる馬を一疋引張て參りました鈴の音をカ
ラ〳〵させ向ふ鉢巻に半股引で草鞋ばきの若者が若親方何方へ入らッし
やいます五ウム佐原まで遣て呉れ成たけ急いでな此馬ハ達者か若馬ハ極
達者で御座います五ぢやア親方直ぐ其の扮装でお出なせへますか五アヽ
構う事ア無へから跡を頼むよ漁があつたんだから別段俺が居ても居無へ
でも仔細無へ能く喧嘩や間違への無へやうにして呉れろと五郎ハ其場か
ら馬に乘て佐原まで遣て參り段々様子を聞て見ると全く大戸川の家をし
たゝかに打毀したと云ふ話しで御座いますから直に又々夜に入ても構ハ
ずドシ〳〵遣て參りました

第三十五席

此間路も餘はどございますけれども夜を掛て構はず出掛ました事で沙ざ
いますから夫より大戸川五藏の處へ來て見ると家も散々になつて近所の

者が那方此方へ集まり種々の沙汰を致して居るのを聞て五郎ハ馬より飛
下り五モシお前方にお聞きヤてエが親方は何方へかお出でなせへました
か男ハイ亂暴な奴等が來やアがつて全体銚子の五郎とか云ふ奴の子分ぢ
やさうだが碌でもねへ奴等ばかし居やアがると見へて八州の御役人の家
を打毀すたア本當に命知らずだ五ウムさうして旦那ハ何處に居なさる男
ハイ此のッイ上のお寺に引移つて居ります五郎は直に五藏に遇つた上で
五親方お前に對して面目次第もない私は然んな淋しひ了簡でハないお前
が兩手を仕て詫なすつたハ出來ない事だ那の時にお前ゑ誤られてスッカ
リ我が折れて仕舞つて惡い事を云つた止せば宜つたと思つて跡で悔んで
居ましたが根が一徹の人間で思ひ込むとカッとしてッヒ前後を忘れて仕
舞ふ性分で飛だ事をしたと思ひながら歸る途中でお前さんの身内の者が
四人ばかり待伏せて居たのをお前さんの吩附か吩附でねへか知らねへが
私の立た事が解つたか四人とも逃て仕舞つたは私の仕合せ四人の僥倖其

まゝ歸つて誰一人りにも口外へしなかつたが何處を何うして家の奴等が聞き違へたか知らねへがお家を散々にして面目次第もないどうかマア只管お詫をヤすから勘辨して下さい是から一々お家を毀した奴等は片ッ端からふん捕めへて腕を折るとも足を折るともして此の土地に置かないやうにするからどうぞ勘忍して下さるやうに只だ勘忍しろぢやア濟ないから元の通りにやア往ねへでも家を建るが雨を見込んで十日の積りでございますが天氣さへ宜れば五日の中にも家を建て仕舞う心得ですからどうか勘辨して下さいまし五藏此時に少しは疵も負て居りましたやうでございましたが莞爾り笑つて　五藏何お前さんが吩咐た譯で無へ事は解り切て居に決して私しの方ぢやアお前さんを恨みとゝ思いません私だつて餘まり意句地のないやうだか家に刀の一本位ゐゝわり向ふ事も知つてますけれども役柄に羞ぢマア〳〵先方が然う勢い込んで飛込んで來た時にゝ黙じ手出しをせずに避るより外に仕方がないと思いましたから私は逃げたんで

決してお前さんに恨みを掛るなどゝいふ事ゝ固より無い又た家を建て下さるといふゝ有難いけれども併し夫はお斷りヤます家から火事を出して一軒燒と思へゞ濟んで仕舞う五イヤ夫ゝ然うでもあらうけれども夫ぢやア私が濟まないといつて直に是から手を廻して七日目に悉皆壁までを附るやうにして假令は生燥きなりと雖ども先づ總殘らず出來を致するやうになつて壁も漸らしいのを入れ却つて先に倍した立派な家にて五藏が頻りゝ辭みまするのを種々に說て遂に是へ住はせる事ゝ致しました

第三十六席

又た別段に酒を一駄御肴料として金を百兩贈りました處　五藏モウから遣て家を建て與れたゞかりで充分だから折角の思召だに依て酒だけゝ戴いて置くが金ゝ受取る譯にやア往ない五イヤ金と云やア金に違へねへが品物を損じたのを私しの方で一々買集めて歩行く譯にも往ないから品物の代と思つて取て置て下せへと無理に押し附て五郎は銚子へ歸り段々調べ

て見ると彼の五藏の家を毀したる者ゝ誰々と分りましたから殘らず銚子へ呼集めてさて玉汝達ゝ乃公の爲を思つてやつた事だらうが却つて迷惑の事で就ては五藏に向つて約束した事も有から茲に居ちやア往ねへに依て那古の初の所へ一二年往て居て呉れろと書面を附けて七八人の者に夫〳〵路用を持たして那古へ遣はし家族の者へゝ夫々手當をして食方にも困らんやうよ致して置きました然るよ或る日の事年頃三十七八になる赤ら顔のデップリした男が參りまして男御免なさいまし親方は御在宅でございますか玉誰郎だか私が五郎だマア此方へお上んなさい男へエ私しゝ元會津の者で清次郎と申しますが道樂で虚無僧の眞似をして旅を歩行いて居ました處から私の事を人呼んで虚無清と申ますが先達てゝ滑川の旅籠屋で私しの噂アおまさといふ者が種々御厄介に成りまして有難う存じます其の御恩がありますから私しが一寸此方へ上げに參りました貫郎は大戸川の五藏に家まで立てお負けよ金までお遣んなすつた其の金といふ

物は全体取れる者ぢやアない處が五藏といふ奴は押出しゝ立派だが根性が乞食見たやうに汚ない奴で金といふと目がないから夫を貰つて仕舞つた然らして盜て何と卑劣の奴ぢやアありませんか向ふは成田、船橋、利根川を渡つて向ふ路ゝ大船津から水戸土浦結城邊りまで手を廻しやアがつて總て此の下總地方に居る處の博奕打道樂者といふ者ゝ一疋も土地に置かないやうにして皆な江戸の御牢内へ投り込で終はなけれアならね〳〵夫よ付て第一番に憎むべき奴は銚子の五郎だから彼をも片附て置きたいと此ういつて居りました近々〳〵の内に手を廻して此の處へ捕方が來ませうから御油斷のないやうに今の内國を賣て終つた方が宜うございませうと思ひます五郎莞爾り打笑つて玉イヤ御親切の御言葉ゝ有難う存じます何れ夫ぢやア支度をして何處か國を替へる事にしやせうといふ處だが私ゝ博奕といふ者は決してしやせん家に網の五挺も七挺もありますから有難へ事にゝ魚はドン〳〵獲れ此節の鰯なぞゝ百年以來話しにも聞た事がない

と云ふ位の大漁で今私が此處を立退て外へ往くといふ譯にも往ません今ぢやア堅氣になつてる私だから別に縛られるといふ譯もなからうと思います

第三十七席

清一夫ハ然うでございませうけれども お前さんの子分衆で止めない者が幾らも有升 五夫ハ良く無へ奴ハ良くねへ奴で縛られりやア夫迄の事モー私ハ素人になり生眞面目で居る者ですから些とも然んな事ハ恐れやアしません大きに御親切ハ有難う存じ升御川といふハ夫までの事でございます

か濟へエー就ちやア親方何と酷い奴ぢやアありませんか五藏め私の嗅アを滑川の茶屋から私ちに知れないやうに他へ引張り出して然うして散々慰さみやアがつて此の女に金の貸があるから夫を返せと此ういやアがるんで尤も嗅アハ何ういふ綾か知りませんけれども何十何兩金を借たといふ証文をやつたもんだから何處までも借た名目が拔ませんで今ゐなつて

抱寐をされた事を公然にする事も出來ず動ともすれバ御用聞八州樣の御案内と云ふのを鼻に掛るので此方で理を持て居ながら口を利く事が出來ません借た金ハ証文が殘ッて居ますが女房を取られた証據ハなし女房ゐ聞やア俺の方で証文を書てやるから爪印をしろ斯して置て此の金が出來めへから其時にハ表向き汝を女房にする今の嗅アを子供ぐるみ追出して汝を跡に直すと此ういつて夫でお前さん家へ往て見れバ五藏の嗅アハ小袖ぐるみで子分の十七八人もゐつて女の三四人も使つて居るもんだから女も是に迷つて遂にお前さん不實の了簡を起して私チを壁ゐするといふやうな事で私ハ忌々しいから奇麗札張り吳ちまをうかと思いましたが如何にも殘念だから金を拵らへて持て往て向ふへやつて胸算をした處が借た金の高よりハ女を賣た方が金になるだらうと思ふから借もしねへ金を返すのハ忌々しいけれども其の金を向ふへ濟して置て女ッ子を受取て女郎にでも叩き賣て吳れやうと思ふんで然うして置て損をした金ハ又た私

が生して取る工風がありますから五藏の野郎にゝ私が目に物見せやうと此う存じて居り升就ちやアナ兼ましたが其の金高ゝ澤山でもないが十八雨ばかりでござい升どうか親方私しにお呉んなさる御縁ゝありますまいから利を附て貸て下さる譯にゝ往ますまいか五夫ゝ御尤もの御話だが私しゝ金貸でないから利を附てお貸しゆす譯にゝ往ない、どう云ふ綾か知らないが其樣な事に就て私が金を貸すといふ事ゝ出來ません、夫ゝお前さんが何とか工夫を附た方が宜うございませう、お生憎樣だが四文も出來ませんと「へエ左樣なれば宜しうございい升

第三十八席

五「宜しければ宜うございますからお歸んなさい」商人店へ行やアしめへし左樣なれバお歸んなさいも無へもんだ、まゝにしやアがれと、獨り言して其儘虚無僧の淸次郎ゝ此所を立出で今度ゝ取て返して五藏の家へ往て是と同樣の事を云つて今度ゝ悉く五郎を罵りますから五藏ゝ目の色とかへて大いに怒り忽ちの間に二十里餘方の處からして御用聞手先といふ者を殘らず呼出だして速やかに之よりして銚子へ乘込み一統召捕て仕舞うといふを聞き近邊の百姓などが旦那や何かに御怪我があつてゝならねへから乃公等も土地の者だから操出して往て加勢をしなけりやアならねへといつて我も〳〵と云つて皆一同竹槍を拵らへ或ゝ長脇差刀乃至ゝ鍬の柄鋤の柄思ひ〳〵の獲物を持て船を十艘ばかり拵らへ利根川を押下して銚子へ行うと云ふ此事が忽ち銚子の方へ聞へたるに依て五郎大ひに怒り何の意恨があつて乃公を召捕るんだ、モー此の五六年といふ者ゝ徒ら事ゝ決して仕めへと思ッて誓ひを立て觀音樣へ願をかけ堅氣になつてるのを召捕るといふゝ何ういふ事か夫ぢやア矢ッ張り大戸川の五藏めが恨みがあつてする事だらう、迚も國を立退く位ならバ目に物見せて呉れやうと云つて同じく竹槍を用意いたし、青竹を削つて鮪の油を附て火を燃た上へ之をかざし丸で眞實の槍の如くにいたし、各々長刀を帶し、脚胖、脚掛、草鞋掛け或

ん手胴鉢巻何れも甲斐〳〵しい扮装にて是れ又た船を四艘ばかり出來利根を逆上つて小見川の邊りまでやつて來ると夜ん深々と更け渡つて居り陸ん陸で手分けをして押出した處が斥候に出た者が取て返し、親方、モー向ふから寄せ來つたといふ中に葭の茂みの間だからポン〳〵ポーンと鐵砲を打出した、是ん五郎の方より打たにんあらずして先方より打たるなり、此時に五郎怒つて五御用聞が鐵砲を以て向ふといふ事んない、扨ん全たく御用の二字を肩に掛て私しの恨みを晴さうとするか、向ふが其氣なら此方も俠客男達の腕前を現はして呉れん、此方も打てよといふが否や兼て用意をなしたる鐵砲ド、ン、ドーンと打出した、五郎ん必ず鐵砲ん打まいと思ひ只だ備の爲に用意したる處向ふから打來つたるよ依り慌ろなく右の次第に及びました、扨双方互ひに鐵砲を以て打合ひ其の勢ひ龍の一波を翔る水玉の如く彈んヒユー〳〵と飛來る其中を潜つて銚子方より漕出だしたる一艘の船房州太神宮村の生れにて成田の甚助(近頃有名なる成田の甚藏とん

逆います)或ん十日市場の長次郎是等を頭と致してワツワツと押寄ると向ふからも押て參り船と船と突合ひて友七半六といふ二人が竹槍を以て船の表に現はれ向つて來るのを二尺ばかりの一刀を手拭を以て手よ確と結い付たのを振廻しながら十日市場の長次郎一人を忽ちの間に切て落した

第三十九席

今一人を成田の甚助が竹鎗にて利根川の中へ突落した、是が爲に向ふ方ん少々弛んで見えたるが又入れ替つて布川の源藏同じく竹鎗をもつて突て來る奴を十日市場の長次郎是も長刀を持て肩先から袈裟掛にぶつ切りました、又び谷中村の德藏突て來る奴を此時又た漕付たる銚子の五郎覺えの一刀を引抜き横合から躍り掛つて一太刀二太刀合すが否や川の中へ切込んで仕舞ひました、然る處へ銚子方から八日市場の傳右衛門長脇差を持て躍り込んで來るのを向の方より竹鎗をもつて突て參つたのは土浦の櫻木の傳藏夫ッを突然り横合から成田の甚助躍り掛つて竹鎗を以て突た處へ

ワイ〳〵と云いながら船を漕寄せ決して左樣の事なしてゝ成らん引たゞ〻と云ふ中に寶ゝ五藏黨の奴等ゝ勢い能くやつて來たけれども向ふゝ強し、さらぞと云つて引よゝ引れずして居る中に引た〳〵といふ聲を聞き之を機會に佐原或ゝ津の宮の河岸まで引揚げました此方ゝ尙逐て往うといふ處へ船を寄せて「銚子の然んな事をしちゃア往ねへから已と一緒に來ねへと聲を掛たのゝ乘て兄弟分の中の港の忠三郎、子分を大勢連て此處へ參りました邁マア〳〵此の處でゝ往ねへから俺と一緒に來なせへ五イヤ湊の思召しは有難へが意恨に意恨の重なつたる五藏の奴等モー勘辨ゝならねへ邁マア〳〵然うであらうけれども此の處ゝ引上げねへと嘘にも上の御用といふ肩書があつて見れば理を以て非に陷るやうな事があるからと漸々に銚子の五郎を引連れて中の湊へ引揚げ其外の者ゝ皆一同船を以て夫々引揚げ、五郎ゝ湊の方へ參つて銚子に立歸る譯にも行ず忠三郎の家へ留まりました、五郎は三四ヶ所の手を負ましたが手と云つても切られたり突かれたのでゝございません、鉛砲疵でありますが是も皆ンなかすりでございますから大したる事でもなく其手當や何か湊の忠三郎が懇切に致して呉れました、流石に今まで派出よ暮した銚子の家も何となく調子ばつれに成つた有樣、女房子ゝ何樣成つたることであるかと思ゝぬ日とてもないのゝ人情女房子の方ゝで湊の忠三郎方へ引とられたることゝ知つて居りますれども些の利根川を渡つて行にも此ころは何となく嚴重に川べりを調べて居る、江戸から銚子へ下る銚子から江戸へ登る處の旅人よて何にも差支へのない者でも中々嚴重にして渡しません故參る事も出來ず女房ゝ只胸を焦して居るばかり

第四十席

此方ゝ五郎疵も漸々に癒り其歳もはやたつて翌年になり山も笑ひ鶯の囀く音も聞へ櫻ゝ追々はころび初め天氣も麗朗にございまするにより忠三郎ゝ邁銚子ノ今日ゝぶら〳〵大洗へ往うじやアいなか五「大洗と云ふなア

何だ潮大洗の明神様と云ふのがあつて丁度三月あたりから日並によし浪も静かで沖へ大分魚も見へるやうだから俺と一諸に往きなさいと供をも連ずたつた両人で出かけました、來て見れば彼方は八重の潮路を見晴すも大洗といふ位でございますから岩にあたつて散る浪へ花の散かと疑がはれ潮いかに銚子の此様な三月の穏かな日和でも此處の浪と云ふものへ彼様な有さま夫でも春先へ餘ッぽど浪が静かでアヽ好景色だ五好い景色だナアと是から明神へ参詣をしてぶら〳〵來ると向ふから嬋娟窈窕たる處ろの一婦人黒縮緬に摸様のある處の衣類に錦珍の帶を太鼓に結び白足袋に黒天鵞絨の鼻緒に雪踏を履き頭へ大きな丸髷にすき透るやうな鉄を差し露の垂るゝやうな鼈甲の櫛を頂き侍が五人中間が六人女が九人がかり前後左右に侍てやつて参りましたのが、デロリと此方の両人を見て何か側に居る侍に叮く様子でございましたが其うちに侍一人飛んで参り侍エ

ヽおまいさん方へ是から何方へゝ御用で御出よなりますかと突然聞れましたから五郎も忠三郎も譯が分りませんが忠三郎へ潮イエ私くしどもへ明神様へ参詣に参つて別に用事へでございませんぶら〳〵保養に参りましたので侍左様ならば只今主人が魚來港へ立寄られましたから夫へ直においでを願ひます潮へエ夫へお人が違やア致ませんか侍イエ決して人違ひでへございません銚子の五郎親方と被仰るのへ誰某で銚私しが五郎で御ざいます侍アヽおまへさんかへ夫じやア最違ひへありません何卒被爲入て下さいおさきへ参つて居りますから屹度來て下さるやうにと引返して右の侍へ魚來庵へ昇りました銚港何んだらふ一向分ら子エ五何れ何ゝ子細のあることだらふ不思議のことダ併し來いといふのを逃げても宜くねエから往つて見やうじやアないか

第四十一席

銚「彼のお女中が喚んだんじやアあるまいが殿様でも先へ往つてるんだら

う、何か俺に悪いことでもありやア致子エか……別に斯うといつて悪いことを致た覺へも無へが、港ナアニ彼の奥樣がおめへに惚れてるんだらふ五、申戯言ひナさんナ面白くも無へ夫りやアおめへなんだらふ、港ダッテ俺なら俺の名指で來るンだらふ五、マ、ア惚れた惚れ無へへの話さじやア無へ何か是にゝ子細があるだらふ往つて見やうと、直に兩人ゝ魚來庵へ參りますと○「先刻からお待かねで汚ざいます、何卒お昇りをといふから下で樣子を尋ねて見まするとに別に殿樣ゝ居ない奥樣がかりと云ふので、港どうも不思議だ何だらう、マア銚子ノ先へ昇ン子エ銚、然んなことを言はねエで港おめから昇つて呉れ、港ダッテ何だか極りが悪いぢやアないか、二階の口から以前の侍が侍サア〳〵早くお出でがなくつてゝ私しどもが困る最前からお侍かねで、と直に二階へ案内を致され昇つて見ると紫縮緬の大きな滿團を敷て其上へ坐つて居るのゝ奥方とみへ威儀揚々と致て居ります其側に女中が手を突て居ります、次の間に侍が一統控へて居ります侍サア〳〵御遠慮

なく是へ、此時正面の方の美人ゝ眞朱なる唇より發する聲音と云ふものは、鶯の三光を吟するかと誤るゝばかり、美女となると聲も美ものでございます　婦人「サア銚子の五郎さん此方へ何卒お進み被成つて銚へエ　婦人「港の忠三郎は兼て旦那も御存じのことで今始めて忠三郎ゝ逢ふのかゝ知らないが妾しも豫て顔を見知つて居るが忠三郎何かエお前の所に五郎さんゝお在のかへ港へエ私くしどもに此節參つて居ります　婦人「ナニ耻かしいことだが最包ひべき譯もなく旦那も御存じのことだから明らかに話しますが五郎殿おまへゝ私しを忘れたかエ銚へエ　婦人「ソレ何日ぞや上總の眞龜に於て私しが災難ゝ出遇た時にお前に助けて貰ひお金を費やして氣の毒千万なことでありました、早速お禮爲可でありましたが種々と事情もあつて其儘に打過ぎ妾も追々倖を得て只今でゝ御城内の老臣のうちの一人鈴木飛彈守の家に居ます港へエ　婦人「舊ゝ高崎の藩、崎藤右衛門の娘ゆきだが御存じでありますか子

第四十二席

銚「ヘエ是ゝ〳〵恐入奉ります仰の通り成程左様でございます何様して御前様にゝ是へと云ふと女ゝ口ゝ袖を當てオホ、、、と笑ひながら婦人ナンダ子エ御前様なぞゝいつて夫よりか矢ッ張ゆきと言つておくれ其時のお前の世話といふものゝ一ト方ならないことで旦那にも其ことをお話しヤすと世の中にゝ情の深い人がある成程俠客男達といふものゝ偉いふものであるかといつて雨降風間の徒然ゝ例も此話しが出て殊の外旦那も感心をしてお在被成が何様して此方へ參つたことでござるか銚「ヘエ少々不時の災難がございまして婦人夫ゝとんだことで何云ふ存細かヤア綴くり承はりませう、コレ早くお膳をと云ふと側に扣へて居りました腰元が物柔かに立上ッて愛早く女中お膳を出しナ玄畏まりましてございます、と言ひながら次の間に扣へて居つたる處ろの女中が七八人にて銘々夫へ。お膳を並べ夫でゝいけないから此方へ這入たが宜い銚何う仕りまして是ゝ

て御免を蒙むにます忠三郎何いふ譯で五郎さんが此方ゝ來て居なさるか遊左様ならヤヤ上ますが實ゝ是々ケ様ケ様と彼の件を落もなく譚りました是を聞ておゆきゝ眉を顰めて驚いたる様子ゆき夫ゝ氣の毒のことう〻併し女に口出しゝ出來ないから能く旦那に話しをしてお願ひヤして あげませう先今日ゝ快く一盃飲ていつて呉るやうにと太したる馳走に相成て忠三郎五郎の兩人ゝ思ゝず酩酊をして立歸る、然るに水戸の御家來菲山東馬殿をもつて松平右京亮殿の陣屋へ被仰越れましたにゝ銚子ゝ高崎右京亮殿の持ちでございます其御地に罷有伊貝根の町人木村五郎といふものゝ中々に慈悲を深くし恩を忘れず上を敬ひ下を惠み親ゝ孝行なる趣き中納言様の御聞に達し居ることで以來常陸下總上總安房の四ケ國海岸の取締りを五郎に被仰付る兎角漁獵を以て世を渡るものゝ荒々敗のみで仁義の道を知らず況てや禮もなく剛毅木訥な者により是等へ教育を加へ

天下御禁制の事を爲ざるやう取締りを五郎に申し付け加之に副として港の忠三郎に副役に申付るの段御承知被有て可然でござらふ、既に五郎ゝ當節此方領地海岸筋に罷有つて追々漁夫等の品行を正し身体を方正くして言語應對總てのことを改正致し日夜此ことに肝胆を砕き意志を勞して罷有よより漸々管地にも近日に罷越に因つて聊差支無之樣に被成て可然と申すことでござる是を承まゝつた右京亮殿の陣屋の者も國江戸兩方へ早打を打て此事を申上た處ろ水戸殿の仰せなれば何で異存のあるべき速み右然るべきとの沙汰がありましたから茲ゝ於て五郎ゝ滯りなく故郷へ立歸へりました

第四十三席

扨深澤清兵衛大戸川五藏此輩ゝ知何にも五郎が海岸向の取締りといふ役を被仰付たのを面白からんことに思つて居りましたが彼の虛無淸なる者ゝ捕方などの役にゝ立ぬ男なるが至つて奸智に達たる者なるに依り五藏

の吩咐に依て虛無淸惡計を周らし五郎を殺さんと計る此方ゝ銚子の五郎或る一日のことなりしが銚子を出て乾兒を二人りゞかり連て上總の小濱といふ處ろへ來て小濱屋といふ旅店へ泊つて居るのを豫て巧んだ事でございますから今夜の泊りゝ何處明日ゝ何處と大抵分つて居りまするにより五郎ゝ深く酒を飲ませんが一杯飲でマア宜い鹽梅に漸々濱方でも博奕や何かするものが無くなつチまつて此鹽梅じやア土地から繩付や何か出子エやうに成るのが何箇のことだ俺ゝマア行屆かねへ身分で海岸の取締りなどゝ嗚呼がましい事だが冥加の事だから忠三郎と二人で何方も何にも知らねへ讀ん同志書ん同志此んな眞似をやらかして居るんだ……何だエ姉さん改たまつて手を仕て玄エー只今此處へ三十格好の小意氣なお內儀さんがお出になつて和郎にお目ゝ懇り度と申升五ウム此方へお連れ申ねへダガ何だへ夫ゝ玄何だか滑川の中屋でお目通りをしたお政と云ふものだと申升然うかマア此方へ通してお呉れといふ處へ入り來つて御免な

さいまし五「ヤおまさ能く來たな　まさ「今夜此方へお泊りになるといふ事を伺つて參りましてございますが妾しゝマア頓だ苛い目に遇いましてござい升五「何うした　まさ「アノ盧無藩の野郎でございますが漸々の事で中屋の旦那に金を出して貰いまして表向きゝ妾しが時借同様にして算段した積りで取られて此方の手を切りました處が茲に一ッ妾しの身に困ッた事が出來て居りますと云ふのゝ妾に一人の妹がございまして元江戸の鳥城で鐵物屋へ嫁附て可なりの暮しをして居りましたがどうも姑が嚴しい者でございますから夫婦中ゝ宜うございましたが其處にとう〳〵居耐まれないで出て終いまして此の小濱の脇の御宿といふ處へ參つた處が目當にした惡意な者が行方知れずになつて居り一晩泊つた宿屋が雷の半五郎といふ恐ろしい苛い奴の子分の家で然うすると私先無法にも雷といふ奴が妹を捕まへて云ふ事を聞けの女房になれのと貴立られて其處を逃出し妾がまだ滑川に居る事を知らないので江戸へゝ歸れず途法に暮れて居ました

第四十四席

其時土地の湊家といふ旅籠屋の息子に救ゝれてツイ怪な中に成ました夫が雷の耳に這入た者でございますから此節ゝ雷樣も遊び人の方を止めて仕舞て深澤清兵衛さんの子分になつて肩書ゝ御用聞と云ふやうな鹽梅で夫を鼻にかけて威張て居りますが、乃公の云ふ事を聞ねへで旅籠の息子と宜い中よなつたのゝ乃公を踏附にしやアがつたんだから茲の家ゝ火を附て燒て仕舞はなければ成らないと云ふので夫に就て大勢中へ這入た人もありましたが皆な向ふ者でございまして其中に妾しの居處が分つて手紙を遣しましたもんですから往て見ますると手前が承知なら此女ゝ俺の女房にするがどうだ俺の女房になれば助けてやるが成らねへやうなら湊屋の奴等を初めとして女ッ子も其儘にゝ置ねへと妹ゝ高手小手に縛られ猿轡を箱めて奥の暗い座敷へ投り込でありますゆへ妾しも可愛想だとゝ存ましたが万一命でも取れてゝ大變だと思ッてお前マア此お方の云ふ事

を聞たらどうだとヤましたを處殺されても嫌だとヤますのを實に因り果て居りますと、此話しを聞た五郎ハ根が正直なんでございますから五雷の半五郎といふ奴ハ女にばかりてだはつて居る奴だ此前も眞鶴の柏屋と云ふ宿屋の女を苛い目に遇せやアがつた夫と一ッ手だ　まさ「さうでございますか五夫ハお前に云つた處が分らねへ話しだ其樣な事ばかし仕て居やアがる　まさ「就てハ親方樣ハお取締の事でもございますから何ぞ一寸被爲入てお扱ひ下さる譯にハ參りますまいか　五夫ハ御免蒙らう成程患三郎と俺とハ取締りを仰せ付られてハ居るが此前も雷の中へ這入て今いふ通りの話で迷惑をした事もあつた然輕々敷く飛出して行く俺ぢやアねへと云ふと何だか俺が重々しく權式を附るやうだが其樣な事アねへ俺が口を利よりハお前の懇意の者を以て話をした方が宜らう　まさ「處が和郎盧無清の野郎まで向ふ方になつて仕舞て外に頼む者もございませんゆへどうか親方恐れ入りましたが一言……　五イヤ俺にハ往ねへ　まさ「妾ハ和郎が此方へお泊

りになつたといふ事を聞て態々是へ參りましたのでございます此ういふ事の始末を附て下さるのが失禮ながら御取締ぢやアございませんか　五夫ハ取締にやア違へねへが雷の野郎の事ぢやア大きゐ迷惑をして居るから　まさ「夫ハさうでもございませうが人一人助けると思召してどうかお扱ひ下さいまし處へ一人若い者が飛て來て　若「イヤお政さん此處に居るのかへ何處で酒を飲で來なすつたか知らねへが雷の半五郎さんが酔拂つて來て刀物三味モー湊屋の家ぢやア引繰返るやうな騒ぎ土地の名主樣だの村役人樣の處へ往ても誰も來て呉れねへからお前さんでも來て鎮ッて見なけりやア何うしても往かねへ湊屋の家ぢやア皆んな逃て仕舞つたがアノお前さんの妹子ハ逃るよも逃られず縛られて居て何うする事も出來ない

第四十五席

まさ「さうでございますか此の通りでございますから親方さん何か助けると思召してお出でなすつて下さい　五どうも何だか事實が合はねへお前方

の云ふのがどうも俺の氣に入らねへといふ處へ又一人馳て來て男「モー今切るやうな騒ぎだからどうか早くお前さんが來なくつちやア往ねへ　まさ」此の通りで妾が一人參つても迚も届きませんどうか親方さんお願ひ升モシお出で下さいませんやうならバ妾しは此所で自害をして仕升います　五マア〳〵待ねへ　まさ「イエお留下さいますな留て下さるならバ彼方へ往て下さいまし　五夫ぢやアお前死ぬ眞似をするのか　まさ「さう云ふ次第ぢやアございませんけれど其處をどうぞお願ひヤ度ので二人の若い者も男「親方貴郎樣でなくちやア届きませんからどうぞお願ヤますと云はれてさらバと云ひ乍ら一刀を腰に打込で二人の若い者と共に出掛て參りました　五「傍宿の湊屋の家に居るのか　男「左樣でございます　五夫ぢやア此道が宜らうと片々く小溝堤片々く竹藪のある道をやつて行く途中で突然ドーンといふ銀砲の音アッと驚ろいたる處へ竹槍或ハ長脇差各々獲物を取て五十人ばかり夫へ飛出して來り第一番に深澤清兵衛「ヤイ野郎女の甘口で此の處ま

で引出じたが汝の命を取て呉るから覺悟をしろ汝ハ海岸の取締とか大きな事を吐しやあがつて贋金を使ふ奴だ　五「ナニ……扨ハ汝前々の事も忘れやがつて俺を茲まで引出して不意打を掛るのみならず贋金を使つたと云はれてハ聞捨ならねへ俺が何時贋金を使つた　清「贋金でも使はなくつて茶屋小屋へ上つて金ビラを切てボン〳〵　貴澤な眞似をしやあがつて親方とか親分とか云はれる事ア出來ねへ事だ夫に下總でも二三軒の茶屋から怪しい金が出た又た此上總でも其金が出たと云ふから段々洗ッて見りやア皆な汝から出た金だ贋金使の廉を以て軍鷄駕籠で送られるのも不便だから寧そ一思に息の根を留てやらうと俺ッ等の情から差へ引出して喧嘩の体で殺してやるんだ斯く云ふ深澤清兵衛ハ何を隠さう元ハ水戸の藩中涙人しても水戸の殿樣の御恩を忘れねへから汝のやうな者を海岸取締にしたのが水戸家の笑ひ草にもならうと思ふから聊か忠義の心を以て汝の命を取て仕舞からさう思へと云ふ折しも五郎ハ聲を張揚て　五「ヤア己れ卑怯

よも偽り事を云ひ立よ女如きの手を借て俺を是れまで呼出すのみか俺に覺のねへ贋金使へなどゝゝ奇怪全たく俺が贋金を使つたか使はねへか潔白の上役人の前へ出て黒白を附るから俺と一緒に來い汝達の刀に掛て死ぬやうな俺ぢやアねへ

第四十六席

遣エー分らねへ奴だ面倒だからやつて終へといふ時しも心得たりと云ひながら第一番に切り込で來たゝ虚無僧の清次郎五郎ゝキッと之を見て五ヤア汝ゝ虚無清だな此な事を初めたのも皆んな己が猿智慧から起つた事だから天命の程思ひ知れと面部より一刀を浴せ掛たから其儘ドウと倒れて相果たウヌ野郎と云いながら上總下總の別なく何れも清兵衛五藏らが子分の者ゝ勿論其外一味の者共皆々草鞋穿きにて何處の誰が殺したとも無く五郎を殺さうと云ふ積りにてドヤ〳〵と打て掛るを五郎ゝ身を交せ或ひゝ跡に下つて前の奴を足にかけ横に來る奴を拂ひ後ろから來るを

脊負なげにして上から浴せかけるなど手練の早業を以て忽ちの間に八九人の者を殺した處へ大戸川の五藏・五藏ヤア先刻から見て居れば思ひの外に人間らしい眞似をしやがるサア是からは汝と我との命の取遣り五ヤー大戸川汝と俺とは能々の敵同士是まで汝を何度生して置たか知れねへが其の恩が却て仇になり汝等のやうな奴等ゝ理屈や上の御法則を言い聞しても解らねへ其上汝の方から仕掛た喧嘩又の出の己れと燈火に入るのも自業自得サア來い五藏巡山戯た事を吐しやアがるなと突然竹槍を以て突て來るのを拂ひ退けると五藏ゝ前へのめる奴を躍り掛てエイと一刀切り込んだから跡へさらうとして傍らの溝堀の中へドブリと落ちた上から長脇差をモロに取て脳天より致して突ましたから何かは以て耐るべき此の處で五藏は即死に及びました跡ゝ此の權幕に驚いたから何れも皆な算を亂して逃げて終いました五郎ゝホット一息吐き五アー飛でも無へ目に遇へが遇ふものだ併し此方でも幾人か殺して見りやア此儘にゝ濟されね

へと取敢ず小濱の名主方へ往て事の次第をだん〳〵物語りまして先づ五郎ゝ茲に足を留て受た疵の手當を致し名主方より水戸家幷に領主の方へ注進に及びました其中に聞傳へたる處の那古の初五郎或ひゝ水戸表からゝ湊の忠三郎もやつて參り又た水戸中納言樣よりは韮山東馬柴田進梅澤新次郎などゝいふ方々が乘込んで來て段々檢ためて見ました處が重立た奴ゝ大戸川五藏深澤清兵衛或ひは虛無僧清次郎など何れも容易ならん奴で夫々不正の廉もありまするに依り大戸川の五藏深澤清兵衛諸共に關東道案內御用聞の義ゝ御免を仰付られたさて彼のおまさといふ奴は何處へ往たか行方知れず段々聞合せて見れば御宿の湊屋の家にゝ右樣の事ゝ皆無形無し全く虛無淸に賴まれて致した事と見へます

第四十七席

五郎が斯の知き者に欺かるゝゝ思慮のないやうに思召す御方もございませうが兄々情け深い人と云ふものゝツイ其情が先立ち氣の毒だと云ふ處

からして自然斯云ふ事に相成まするもので乃で死骸ハ皆な取片附になり大戸川の妻子ハ所拂ひになつて終いおまさハ人相書を廻してお尋ね者に相成居りますす五郎ハ疵も癒え全く元の身体になりましてザンザめかして此の處を歸りました水戸御役人ハ一日先立て皆お歸になり那古の初五郎ハ銚子まで送らうといふのを押留めて是も國許へ歸し濱の忠三郎と打連立て立歸りまする途中蓮沼と館の間まで來ると松の樹に女がくゝし附られて居る廻りに大勢人が集つてワイ〳〵いつてるのを見る氣も無かつたがヒョッと一目見ると例のおまさ氣味が宜いと思つたが人々を掻分て五コレ汝か途法もねへ奴だ儘かばかりでも汝に惠んでやつた處の金を忝けねへとも思はねへで虚無清と切れたなぜ俺を瞞着し呼出しをかけて俺を殺さうとしたな汝が男なら只ハ置ねへ女だから此儘俺ハ見逃してやるが今此通りフン縛られて居るのハ何か惡い事をしやアがつたか一人の男夫へ言て此奴ハ途方もねへ奴で昨晩蓮沼の丁子屋といふ宿屋でお客樣の寐

て居る處へ遣込んで行アがつて色仕掛でスッカリ客を欺して仕舞てお客の物を引攫つて逃る處を宜い摘梅に隣り座敷に此の体を見て居たのが土地の者でございまして餘り憎いと云つて打捕まへて此の處へ引張り出しましたが此女ハ方々の旅籠屋で然う云ふ事を働くだらうと茲へ曝し物同様に縛めて置きます五ウム併し女といふ者ハ斯る處の多い者だ其裸体でも可哀想だから私が扱ふからどうぞ免してやつて呉んなさい……ヤイ女此の土地ゑ居やアがると聞ねへぞ汝ハ江戸だと云ふが江戸子の面汚し其眞正ハ大方江戸生れぢやアあるめへ太へ事をしやアがつてサア只だ今江戸へ行け銭を持たねへと又た太へ事をしやがるから江戸へ行くだけの路用を呉れてやるから是を持て行けと聊か路用だけの金を遣はしまして是を見た湊の忠三郎殆んど感心を致しまして遂成程銚子お前ハ天晴なんだ五ナーニ彼奴が野郎なら只ハ置ねへが女の事で仕方がない併しどうも此眞似ハ中々出來ねへ土地の者も一同只感心して居ります由に又ハ極り

惡げに此の所を立去りました男アア親分御覽なさいまし彼樣な大膽女でも有難へと思つて跡を振向ちやア拜んで行ます五アハヽヽあれで心を直しやア宜が併し皆さん飛だお邪魔を致しましたと跡に言葉を殘して銚子の五郎ハ此處を立去り其儘故郷へ歸りました

第四十八席

銚子の五郎ハ故郷へ歸り早速子分の中より筆を能く執る所の者に文を綴らせ、扨海岸取締仰せを蒙り有難き仕合せに存じまする併しながら根が下賤の者にて中々取締も屆きかねん事で強て之を施こさんと欲する時にハ御館の御威光を頭ゑ戴かぬれば只だ御館の御威光を以て我まゝなる取扱を致するやう思ひ誤る者も有り甚だ迷惑の義にございますれバどうか是ゑて平に御免を蒙り餘の者を御見立に相成やう願ひ上げ度く存ずるといふ當時の辭表を水戸家へ差出だしました然るに水戸家よりは今少々の間勤めて呉れるやうにと強てお勤めがございますを

夫にてハ際限もございません事にてどうぞ平に御免を頂戴いたし度とす
する處左樣な事を云はずモー兩三年の處我慢して呉れ其中にハ又方法の
立て方もあるが海岸の取締にハ其道を心得た者でなければ扱い悪いに依
て迷惑でも相勤めて呉るやうにと再三の仰せゑ依り捨ろなくして又々勤
めて居ると先づ兩三年何事もなく漁も充分にあり田畑も實り人々豊年を
唱へて何れも油斷を致して居りまする中に獨り五郎ハ善い跡で悪い事で
も無ければ宜かと密かに案じて居りましたが頃しも八月の下旬二八月と
唱へ兎角海上を往復致す者ハ此月を氣遣ひまして成たけ危險い濱へハ近
入らんやうに致して居りますが八月の十七日小雨がバラ〳〵降て參りま
する中に思ひ掛なく時候違ひの霰が降て參りまして其の寒き事云はん方
なく忽ちの間に空間悪くなつて參ると思ふ間もなくドッと沖から上て來
る雲ハ一圓に廣がりまする途端雨ハ盆を傾くるが如く波立荒く相成り海
上の暴れ方ハ一通りならず初めの中ハ南東の風であるかと思ふと又樣ッ

て北風となり西に變り四方吹廻しの風にしてドッと云ふ有樣

第四十九席

折しも濱方よりの注進に銚子川口の先にて船が一方ならず難澁をいたし
て今にも顚覆りさうだといふに五郎ハ驚き直樣家を飛出して素裸になり
濱方の者一統呼集めて一生懸命此の船を救はんといたしましたが中々風
雨の勢い烈しくいたして遂に沈没致しましたが漸々の事にて十八人の乘
組人ハ悉く引上げました、此船ハ松前函館蛭子町松屋吉郎兵衛の持船にて
多くの產物を積込み江戸表へ赴きし歸りゑ米を悪く買入れまして足入を
充分にして參つた筈でございますから餘程の積荷がありましたが是ハ皆
な沈んで終いました、先づ引揚げました人達ハ悪く延福寺觀音の堂へ入て
手當を致しましたから一人も殘らず差支へなく元ゑ復しましたゆゑ此廻
きを松前函館の松屋へ知らせてやり向ふからも早速出て參りまする處が
只今の時節と違つて不便な事で函館へ行て向ふから出て參るゑハ餘程時

日が懸りますから五郎の其の前に是非此船を引揚げなければならぬが中々入費の懸る事で是にの假令女房を女郎に賣ても金を拵へてしなければならんといふと銚子の物持の多い處へ彼方からも此方からも相應の金を出しましたよ依り色々工風を遂げまして樽其外材木等を海上に浮べて夫へ船を附て自から引揚ました處が荷物の十のものが七ツまで失なりましたが船の滯りなく引揚ましてございます

第五十席

扨この事を領主松平右京亮殿并に水戸中納言殿が御聞にあり殊の外感賞られ實に前後に又た有まじき神妙の致し方であるといつて水戸家から御盃菓子又御刀を一本上下一具以來木村といふ苗字を名乘れ、といふ仰せまでも頂戴いたし、又高崎家よりして同じく上下一具外に白銀三十枚下し置かれました斯ばかりの英雄も無常の風に誘われて享和三年亥七月廿四日見事の臨終を致しました、今も銚子飯沼山延福寺に其墓がございます、或は聲譽見道信士さて悴の勝五郎と申し親に變らぬ俠容にて其名を轟かしてございまするが天保八年酉年昔の恩を忘れず例の蛭子町の松屋吉郎兵衛方よりして千石船へ奥州米を足入充分よ積込まして銚子へ送り五郎殿御逝去の趣きの疾よ承ありましたがどうか之を五郎殿御名前にして失禮ながら貧しき御方があらば御施しを願ひますと申贈りました、其後立派なる所の事をいたしまして、ございまするが勝五郎も其世を渡つて代々其家の人口に傳はりましたと云ふ是皆な五郎の德でございますさて兄弟分の那古の初五郎は天保三年二月十二日和果ました、戒名の「田輪現生信士」房州那古正木村の西行寺に墓がございます湊の忠三郎が其後の事の聞及びませんが銚子の五郎の一代記の是にて大尾でゆざいます

銚子之五郎傳　大尾

明治二十七年四月十四日印刷
明治二十七年四月廿一日發行

版權所有

發行者　神田區佐久間町三丁目十三番地　石渡賢八郎
印刷者　京橋區三十間堀二丁目一番地　梁谷仙三
發行所　神田區佐久間町三丁目十三番地　イーグル書房
印刷所　京橋區三十間堀二丁目一番地　明教社印刷所

特 8
826

097366-000-4

特8-826

銚子之五郎

放牛舎　桃林／講演

M27

DBS-1237